

聖隷クリストファー大学

---

Community-Based Practice and  
Research Center for Health and Welfare

# 保健福祉実践開発研究センター 年 報

地域貢献事業研究 報告書

第7号  
2015



聖隷クリストファー大学

保健福祉実践開発研究センター

## ごあいさつ

聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター年報第7号(2015)の刊行にあたり、ご挨拶させていただきます。

当センターの活動は、2016年度の現在8年目に入っており、当年報では2015年度の実績を報告しております。

地域の実践現場と共同で行う「研究」に重点を置き、その研究成果を地域へ還元することを目的にした2015年度の地域貢献事業研究費の採択数は6件で、報告書は当年報に掲載しております。いずれも地域に貢献する内容で、将来的に共同研究や研究資金制度(科学研究費等)に発展していく可能性が高いと考えられます。研究成果の報告会は例年11月に行われます聖灯祭・ホームカミングデー同日にポスター形式で行っており、地域の皆様や卒業生にご覧いただくと共に、採択された研究代表者によるプレゼンテーションも行います。

公開講座につきましては、時勢やニーズに合ったテーマ設定をし、テーマに応じた適切な集客目標を立てて、2015年度は専門職向けの公開セミナーを2回、一般の方向けの公開講座を2回実施しました。公開講座ではテーマに沿って高名な講師をお招きし、ご講演をお願いするとともに、テーマによっては本学教員も、日ごろの研究や諸活動のご報告を兼ねて、講師として登壇しております。受講者数は年々増加して目標を超える集客ができ、受講者の満足度も高い結果が得られました。今後も引き続き、専門職向け、一般の方向けともに皆様のニーズに応えられる講座を開催していきます。

地域の専門団体や施設、行政から当センターへの講師や委員の派遣依頼も年々増加しており、地域で果たす本学の役割を拡大することにつながり、大変喜ばしいことと感じています。教員が講師として派遣依頼に応じた実績は、ホームページでも公開しています。講師等の派遣につきましては、保健福祉実践開発研究センター事務局にお問い合わせください。

また、「政策形成への関与」といたしまして、2014年度に行いました、浜松市の保健医療福祉等の担当者との意見交換を踏まえ、2015年度は2016年度以降の取り組みの計画立案を行いました。これらを基に、保健福祉実践開発研究センターは、政策に関与できるセンターとして活動して参ります。

これからも保健福祉実践開発研究センターは地域の皆様から必要とされ、“地域と歩む”実践・研究を続けて参る所存です。皆様のご支援ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

2016年11月

聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター  
センター長 大場 義貴

## 目 次

### I. 2015 年度事業報告

1. 地域貢献事業研究 課題一覧	1
2. 公開セミナー・公開講座	4
3. 研修会講師等派遣	10
4. 保健医療福祉団体の委員等派遣	20
5. 研究支援	23
6. 資 料	25

II. 2015 年度地域貢献事業研究 報告書	37
-------------------------	----

保健福祉実践開発研究センター運営会議 委員一覧

# 1. 地域貢献事業研究 課題一覧

当センターでは、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として『地域貢献事業研究費』を配分しています。2015年度は計7件(区分A:5件、区分B:2件)、計2,341,787円の申請があり、保健福祉実践開発研究センターによる審査の結果、6件の課題を採択し、計1,219,752円の事業研究費を配分しました。研究課題6件の報告書を当年報(P.39～)に掲載しておりますので、併せてご覧ください。

(区分)

A: 本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

B: 本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

所属*	研究代表者	職位	区分	研究課題	対象地域	配分額(円)
リハ PT	吉本好延	准教授	A	二次予防対象事業者における老年症候群の発生に関連する因子の検討	浜松市	341,406
助産	久保田君枝	教授	A	妊娠期からの親子の愛着形成と虐待予防のための家庭訪問	浜松市7区を対象とするが、主に北区、浜北区、中区	323,895
看護	高橋佐和子	助教	A	養護教諭と連携した中学生の性教育プログラム開発	浜松市	242,171
看護	神崎江利子	講師	A	妊娠中から産後までの継続的支援を目的とした「プレママひろば」の効果	浜松市	102,193
看護	伊藤純子	助教	B	中山間地・高齢過疎集落の健康課題の再検討- CBPR を通じた実践と研究	浜松市天竜区	93,164
リハ OT	田島明子	准教授	B	障害平等研修の実施とその効果	浜松市	116,923
合計						1,219,752

※看護=看護学部、助産=助産学専攻科、リハ=リハビリテーション学部、PT=理学療法学科、OT=作業療法学科

## <地域貢献事業研究 報告会>

2014年度に地域貢献事業研究費の配分を受け実施された事業研究の報告会を下記日程で開催しました。

日時: 2015年11月7日(土) 10:00～15:00 ※聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催

場所: 聖隷クリストファー大学1号館2階 1222・1223 演習室

発表: ポスター発表および口頭発表 来場者数: 107名



## 2015 年度「地域貢献事業研究費」の募集について

保健福祉実践開発研究センター「地域貢献事業研究費」について、下記の要領で研究計画を募集します。

### 1. 基本方針

保健福祉実践開発研究センターの柱のひとつである「保健医療福祉分野に係るすべての人たちとの共同研究事業」を推進し、共同で課題解決を図るために、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する研究を対象とした事業研究費を募集します。

### 2. 対象となる研究および事業研究費の金額

本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、

A：地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

B：地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

・研究費の配分総額は130万円、1件当たり最大40万円です（共同研究費とは上限額が異なります）。なお、地域貢献事業研究費の総額は、並行して募集する共同研究費の申請状況も考慮し、大学全体の研究費予算の枠内で柔軟に対応していきます。

（配分総額は、2015年度予算決定をもって確定しますので、変わる可能性があります）

### 3. 研究対象期間

2015年4月1日～2016年3月31日

### 4. スケジュール

募集告知	1月14日(水)
研究計画の受付	2月16日(月)～3月16日(月)17時まで
保健福祉実践開発研究センター運営会議開催(申請状況の確認および配分方針の検討)、審査	4月6日(月)～4月15日(水)
保健福祉実践開発研究センター運営会議開催(配分案の検討)	4月22日(水)～4月28日(火)
部長会で配分案決定	5月12日(火)
配分結果通知、執行開始	5月13日(水)
執行役員会に配分結果を報告	5月15日(金)

### 5. 申請期限

3月16日(月)17時

- ・研究計画書は、必ず保健福祉実践開発研究センターメールアドレス「health-science@seirei.ac.jp」へメールでご提出ください。17日(火)以降は、原則として提出データの修正・差し替えはできません。
- ・迷惑メール自動振分機能等による受付け漏れを防ぐため、メール受信の翌日中(土・日曜、祝祭日を挟む場合はその翌日)に受付け完了のメールを返信します。返信がない場合には総務部担当者(武田、足立)へご連絡ください。

## 6. 申請における注意事項

- ・申請できる経費等の詳細は、「共同研究費取り扱い要領」の「7.申請できる経費」に準じますのでご確認ください。取り扱い要領に定められた内容に違反した場合は配分対象にならない場合がありますのでご注意ください。
- ・配分された研究費の執行は、部長会で配分案が決定し、配分結果を通知した後からとなります。通知前の執行は認められませんのでご注意ください。
- ・研究計画書の経費内訳欄には、できるだけ具体的な積算根拠を記載してください。算出根拠の未記入等、記載内容に不備があった場合は、該当経費は配分対象にならないことがあります。
- ・限られた予算を有効に配分するため、既に研究室に備えられているパソコン、プリンター、総務部で貸出をしているデジカメ、ビデオカメラ、ICレコーダー等の申請はできるだけご遠慮ください。特別な事情により申請をする場合は、計画書に申請理由を添付してください。

## 7. 審査の方法

保健福祉実践開発研究センターは、配分案を検討するにあたり、申請された計画書に対して以下の項目を目安にして審査をします(A・Bそれぞれ15点満点。絶対評価)。

項目	A	B
(1-A) 本学周辺地域の保健医療福祉の向上にどのように貢献できるか <5点満点>	○	—
(1-B) 本件が地域との基盤作り等である場合の将来展望 <5点満点>	—	○
(2) 研究計画・方法の妥当性 <5点満点>	○	○
(3) 申請経費の妥当性 <5点満点>	○	○

## 8. 研究成果の提出

- ・研究代表者は、研究期間内における研究課題の成果を取りまとめ、研究成果報告書を2016年6月末日までに保健福祉実践開発研究センターに提出してください。
- ・研究代表者は、保健福祉実践開発研究センターが企画する報告会等で発表する義務を負います。

### ※関連書類

- ① 聖隷クリストファー大学共同研究費取り扱い要領【参考】
- ② 2015年度 地域貢献事業研究費 研究計画書

## 2. 公開セミナー・公開講座

当センターでは、専門職向けの講座を「公開セミナー」、一般の方向けの講座を「公開講座」として毎年度開催しています。公開セミナーは保健医療福祉の専門職からの要望が高いテーマをとりあげ、公開講座は時勢やニーズに合わせたテーマを年度ごとに設定しています。2015年度公開セミナーは引き続き地域の専門職の関心が高い「リーダーシップ」「発達障がい」をテーマに、公開講座は一般市民が参加しやすい「認知症対応」「職場におけるメンタルヘルス」をテーマに実施しました。

### 1 公開セミナー① リーダーシップに関する公開セミナー

#### 1. 概要

タイトル：「対人援助の現場で活かすリーダーシップを磨こうーコーチ型リーダーシップを身につけよう！」

日時：2015年6月20日(土) 13時30分～16時30分

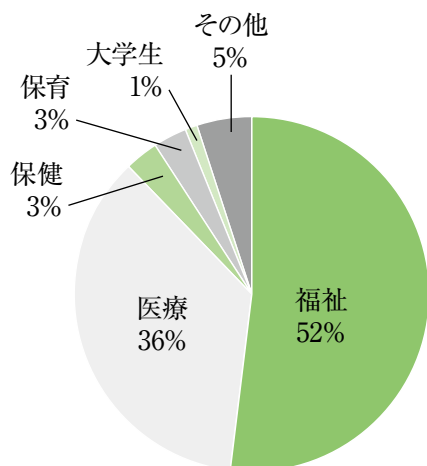
講師：生利 喜佐男 氏 (コミュニケーション・ホーム喜舎代表・医療分野専門人材育成コンサルタント)

対象：保健・医療・福祉の専門職者

参加者：定員100名 参加91名(出席率93%)

アンケート回収：89件(回収率97.8%)

#### 2. 参加者職業内訳(合計91名)



福祉 (47名)：介護職、介護技術専門員、児童指導員、デイサービス開設担当、児童心理司、など

医療 (33名)：看護師、臨床検査技師、保健師、助産師、歯科衛生士、医師など

保健 (3名)、保育 (3名)、大学生・大学院生 (1名)、その他 (4名)

### 3. アンケート結果

#### 設問 1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「職場で新人育成の担当者となっているため、何か参考になるのではないかと思った」「『コーチ型リーダーシップ』に興味があり、実践できるようにしたいと思った」「人材育成していくコミュニケーションツールを学びたい」など、日常の仕事に役立てたいと参加した方、また「新人指導などで行き詰ることが過去にあったため」「管理をしていて、日々スタッフの対応に悩んでいる。どのような関わりが必要か、どのように学習したらよいかを知りたかった」「チームリーダーとして『人を動かす』という難しさを感じたため」など、日頃からリーダーシップについて悩んでいるという方々の声が全体の半数を占めました。

#### 設問 2・3 目的は達成できましたか？ その理由

83%の方が「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」と回答しました。理由としては、「実践でロールプレイをすることで、フィードバックをもらえたことと、自身での気付きも大きかった」「まず自分のタイプ（プロモーター）がわかった。このタイプを受け入れ、長所を生かし、短所を把握することで、さらに成長したいと感じた」「即リーダーにはなれないが、気持ち、心構え、考え方がわかった」など、セミナー内容に関して、前向きなコメントをいただきました。また、「実践していかなければ意味がないので自分でどれだけ実践することを意識できるかの問題」と、今後の課題を感じた方もいたようです。

#### 設問 4 今回の講座の感想

「自分の職種と異なる分野の方と交流しながら演習ができたのは学びになった」「グループワーク、講義とも楽しくて大変勉強になった」など、多職種の専門職者が一堂に会して学ぶ機会が貴重であったという声が多くありました。また、「講義は大変分かりやすかった。演習を行うと引き出す事の難しさを感じた」「自分の得意、不得意について分析し、理解することができた」「自分の今スキルアップすべきところにリンクできてうれしかった(特に専門職のコーチングとして特化してもらえて)」「傾聴が苦手なタイプなので、具体的にこうすれば良いのだと感じられる研修で参加して良かった」など、必要とする知識が得られた事での満足度が高かったようです。

## 2 公開セミナー② 発達障がいに関する公開セミナー

### 1. 概要

タイトル：講演「発達障がい児者の家族支援の効果と課題」

シンポジウム「家族会活動の過去・現在・未来」

日時：2015年7月25日(土) 13:30～16:30

講師：内山 敏 氏（浜松市発達相談支援センタールピロ 所長）【臨床心理士・小児発達学博士】

シンポジスト：アクティブ 代表 村松 良子 氏

浜松市浜松手をつなぐ育成会 会長 小出 隆司 氏

静岡県自閉症協会 会長 津田 明雄 氏

コーディネーター：大場 義貴（本学社会福祉学部准教授）

対象：保健・医療・福祉の専門職者

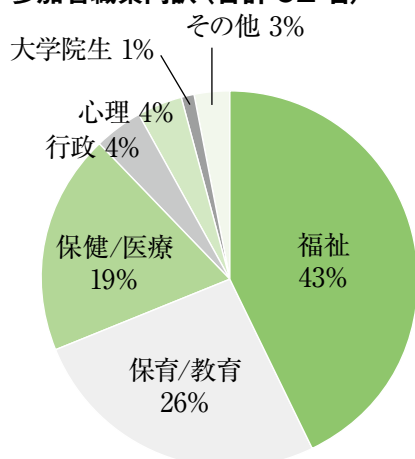
定員：100名

参加：92名

申込：114名（出席率 80.0%）

アンケート回収：61件（回収率 67%）

## 2. 参加者職業内訳 (合計 92 名)



福祉 (39 名) : スクールソーシャルワーカー、相談支援専門員、介護技術専門員、職業指導員、療養病棟ケアワーカー、児童発達支援管理責任者、社会・精神保健・介護 福祉士、福祉施設長など  
保育 / 教育 (24 名) : 教諭、学生相談室の相談員など  
保健 / 医療 (17 名) : 看護師、保健師、助産師、精神科ヘルパー、作業療法士、臨床心理士など  
行政 (4 名)、心理 (4 名)、大学生・大学院生 (1 名)、その他 (3 名)

## 3. アンケート結果

### 設問 1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

約 60% の方が「発達障がい児とその家族に仕事で接する機会が多いため、勉強したかった」という目的でした。また、「家族が抱える悩みや問題、課題、想いなどを捉える。考え方を多く、深く学ぶことで今後の家族との連携力を向上させるため」「障がい児を持つ親の気持ちや悩み、受容するまでの過程、支援者に望むことなどを理解したかった」「発達に問題があると思われる子どもたちの家族との関わり方、支援の仕方はとても難しいと感じるため」など、家族支援について関わり方を学びたいという目的で参加された方が多いことも伺えました。

### 設問 2・3 目的は達成できましたか？ その理由

80% 近いの方が「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」と回答されました。「当事者のご家族からの目線でのお話が聞けた」「障がいをなくすのではなく、質を高めるための支援ができるよう家族に対応していくことを学んだから」「保護者の生の声を聞き、今までしてきたことは間違っていなかったんだと思えた」「余りに複雑な支援の受容にどれだけ自分の力が生かせるか自分の力の無さを痛感した」等の意見が聞かれました。

### 設問 4 今回の講座の感想

「2 部構成で支援者の話、家族の話がそれぞれ聞けてとても良かった」「専門職向けのセミナーであったが、皆様わかりやすい表現でよかった」「初めてこのようなセミナーに参加したが、とても勉強になった。作業療法士を目指している中で、モチベーションが上がった」など、多くの方が学びを実感されたようです。他には、「『家族全体を地域で』包括すると、地域型にするのか地域一体型にするのか、なかなか深い問題だなとつくづく思った」「『親の会』をされている保護者の方のお話もとてもよかったが、保護者自身に支援が必要（疾患や貧困の保護者）な場合の家族支援についても、取り上げていただけるとありがたい」など新たな課題を見つけた声もいただきました。



### 3 公開講座① 認知症対応に関する公開講座（連続 2 回）

#### 1. 概要

タイトル：認知症対応セミナー ～はじめの一步～

各回テーマ・日時・講師：

	第 1 回	第 2 回
テーマ	認知症の初期症状を持つ方々への対応のありかた ～介護者の体験している世界、眺めている 風景に焦点を当てて～	「社会資源の紹介」と「アロマを用いた手浴・ ハンドマッサージの紹介」
日付	9月17日(木)	9月26日(土)
時間	13:30～15:00	13:30～15:30
講師	看護学部 入江拓教授	看護学部 入江晶子准教授 Aromatherapy 凜灯 アロマセラピスト 大石 恵美子 氏

対象：一般の方

定員：各回 48 名

【全 2 回延べ】参加：63 名 申込：76 名 (出席率 82.9%)

【第 1 回】参加：35 名 申込：42 名 (出席率 83.3%)

【第 2 回】参加：28 名 申込：34 名 (出席率 82.3%)

アンケート回収：

【第 1 回】29 件 (回収率 82.9%)

【第 2 回】28 件 (回収率 100%)

#### 2. 参加者 (合計 63 名)

内訳：男性 14 名、女性 49 名

平均年齢：53.3 歳



第 1 回 入江教授の講義



第 2 回 ハンドマッサージの手技

### 3. アンケート結果

#### 設問 1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「自分も親も年をとってきたため、いつ自分が介護する立場、介護される立場になるかわからない」「周囲(家族)に認知症の方が多い。どのように接したらよいか考えることが多い」「自分も親も年をとってきたため、いつ自分が介護する立場、介護される立場になるかわからない」など、認知症に対する知識を深めてご家族の介護に役立てたいという方、「自分の行っている業務の一助とするため」など、職場で活かしたいという方々の声がありました。第2回は、「姑が認知症のため、対応方法を知りたくて」「認知症の家族ケア(元気に過ごすため)に何が必要か知りたかった」「自分の介護を振り返るため」など、実際の認知症の方へのケアに活かしたいという方が多く参加されている事が分かりました。

#### 設問 2・3 目的は達成できましたか？ その理由

第1・2回とも95%前後の方が、「達成できた」と回答しました。理由としては、「症状、そして具体例から対応の仕方を学ぶことができた」「認知症の人への関わり方のポイントや捉え方のポイントを学ぶことができた」「映像による経験者のインタビューは説得力があった」など、具体的な事案が聞けて分かりやすかったことについて満足の声が多くありました。(第1回)

「ハーブティーやハーブを利用してハンドマッサージなど香りの効果、気分転換について知ることができた」「認知症・社会保障制度の基本的な全体像を学ぶことができた点で有意義だった。アロマと認知症予防の関連は初めて知って目からウロコだった」など、社会保障制度を知る事やリラックスする事の大切さが理解できたという声が多くありました。(第2回)

#### 設問 4 今回の講座の感想

「先生自身の体験・医療関係者側の立場等があり、とてもわかりやすく、自分が感じていることを後押ししてくれているようだった」「受けて良かった。もっと早く基礎知識が必要だった」(第1回)

「少人数のグループに分けて体験型(ハンドマッサージ、ハーブティー)で受講できたのが良かった」「嗅覚と認知症の密接な関係を知り驚いた」「介護保険について強い意識を持った」(第2回)

## 4 公開講座② 職場のメンタルヘルスに関する公開講座

### 1. 概要

タイトル：一部) 労働人口激減社会で生じているメンタルヘルス問題の現状～職場でできることから～

二部) 職場におけるメンタルヘルス 自己コントロール獲得へのヒント

日時：2015年10月17日(土) 13:30～16:40

講師：一部) 株式会社スノーム 代表取締役 白石みどり氏(看護師)

二部) リハビリテーション学部作業療法学科長 新宮尚人教授

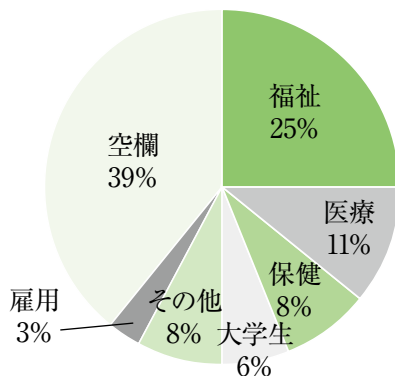
対象：一般の方

定員：60名 申込み：39名 参加：36名(出席率92.3%)

アンケート回収：31件(回収率86.1%)

### 2. 参加者職業(合計36名)

内訳：男性16名、女性20名



### 3. アンケート結果

#### 設問1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「現在、管理職をしているが、メンタルの不調を訴え休んでしまうスタッフが増えている。今後どのように支援していったらいいのか、参考にさせてもらうため」「知人が職場環境が原因らしいうつ状態のようになったことがあり、そのような方への対処法としてヒントになることがあればと思った」「最近メンタルヘルスの注目度が非常に高く、今後メンタルヘルス対策について取り組む必要性を感じたため。また、ストレスチェックの義務化についての理解をするため」など、職場での問題解決に活かしたいという声が多くありました。

#### 設問2・3 目的は達成できましたか？ その理由

70%以上の方が、「達成できた」と回答しました。理由としては、「ストレスチェックの義務化に対し、詳しく知ることができた。衛生委員であるため、大変参考になった」「働き方の改革を国を挙げて行う理由が分かった」「実例に基づいて効果のある取り組み方について何うことができた」「わかりやすかった」など、満足度の高い回答のほか、「今回初めて聞くことが多すぎて、短時間で理解整理ができなかった」「制度をよく理解していないので、ついていけない部分もあった」など、これから始まる制度について理解の難しさを挙げる方もありました。

#### 設問4 今回の講座の感想

「一部、二部ともに大変参考になった。もっと広く、対企業に向けて告知されてもよいと感じる」「旬なテーマで非常に興味深く拝聴させていただいた。事例を挙げての説明は非常に分かりやすかった」「現状を鑑みリアルな講座で知識を得た」「役割からか、管理者からの働きかけばかり考えていたが、スタッフ個々の自己セルフコントロールも必要だと感じた」「講師の方は、聞きやすい話し方(説明の仕方)で理解しやすく大変良かった」



### 3. 研修会講師等派遣

当センターが窓口となり、静岡県内で実施した講師等派遣の一覧です。

※合計 133 件/担当教員の所属・職位は 2015 年当時

#### 1 専門職対象

No	主催	内容	担当
1	浜松市健康福祉部 健康増進課	新任期保健師等研修⑥(地区診断研修) テーマ:保健師の行う地区診断とは 対 象:各区健康づくり課に在籍している新任期 (1年目)保健師	看護学部 鈴木知代 教授
2	静岡県保健師会	平成 27 年度効果的な保健活動をすすめるための 研究・研修ポスターセッション 座長と講評 テーマ:効果的な保健活動 対 象:静岡県保健師会会員	看護学部 鈴木知代 教授
3	静岡県看護協会	看護研究の基礎(西部) テーマ:研究の基本的プロセス 対 象:静岡県内看護職	看護学部 藤井徹也 教授
4	静岡県看護協会	看護職員実習指導者等講習会(特定分野) テーマ:実習指導の実際I 老年看護学 対 象:看護職員実習指導者等	看護学部 野崎玲子 准教授
5	静岡県保健師会	平成 27 年度静岡県保健師会 第 3 回、第 4 回資質向上研修会 テーマ:①育児休業中の保健師応援編 ②子育て中の保健師応援編 対 象:保健師	看護学部 仲村秀子 講師
6	医療法人社団リラ 溝口病院	平成 27 年度新任者研修 テーマ:精神科看護基礎講義 対 象:新任看護師、看護助手	看護学部 清水隆裕 助教
7	医療法人好生会 三方原病院	研修会 テーマ:摂食障害の看護 対 象:精神科看護師	看護学部 清水隆裕 助教
8	聖隷三方原病院	精神科看護の研修会 テーマ:精神力動的な疾患の理解と看護 対 象:精神科看護に関わる看護師および聖隷福祉 事業団関連施設の看護師	看護学部 清水隆裕 助教
9	静岡県教育委員会	養護教員指導リーダー育成事業 テーマ:「保健室経営について」 対 象:小山町立北郷小学校教諭	看護学部 高橋佐和子 助教
10	静岡大学	静岡大学教員免許状更新講習 テーマ:養護教諭の専門性とその成長 対 象:県内の現職教員	看護学部 高橋佐和子 助教
11	浜松市教育研究会	養護教諭部ブロック別研修会 テーマ:養護教諭の専門的能力形成及び必要な能力・ 技術について 対 象:浜松市 1 ブロック小中学校養護教諭	看護学部 高橋佐和子 助教
12	静岡県 西部健康福祉センター	平成 27 年度新任地域保健従事者研修会 テーマ:個別支援の先にある地区組織活動を捉える 対 象:地域保健活動に従事して 1~3 年目の管内 市町職員及び西部健康福祉センター職員、新任職員 の指導者	看護学部 若杉早苗 助教

No	主催	内容	担当
13	浜松市きらめき研究会	各校で対応に苦慮している事例、 自校では経験できない難しい事例等についての研修会 テーマ：小中学校・高等学校の養護教諭として できること、子どもたちが抱える問題への対処法 ～少年事件から学ぶ～ 対 象：市内小中学校・高等学校の養護教諭等	社会福祉学部 社会福祉学科 石川瞭子 教授
14	NPO こども家庭 プラットフォーム 子ども家庭ソーシャル ワーク研究会	子ども家庭ソーシャルワーク研究会講演会 テーマ：国の子ども関連の施策について 対 象：子ども・若者の支援に関わる専門家	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
15	浜松市社会福祉協議会 北地区センター	浜松市北区民生委員児童委員協議会全員研修会 テーマ：「社会福祉」にたずさわるとのこと ～さまざまな「人」と「生活課題」を理解するために～ 対 象：北区管内民生委員児童委員 (主任児童委員含む)	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
16	細江地区 社会福祉協議会	細江地区社会福祉協議会理事会 勉強会 テーマ：地域福祉活動の必要性、 地域が抱える課題や現状等 対 象：理事会メンバー	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
17	浜松市社会福祉協議会	CSW 配置に係る市職員研修会 テーマ：コミュニティソーシャルワークについて 対 象：浜松市役所職員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
18	浜松市社会福祉協議会 北地区センター	福祉相談機関ネットワーク会議 テーマ：コミュニティーソーシャルワークの 必要性について 対 象：浜松市北部の高齢者および障害者支援相談 事業所職員、医療機関職員等	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
19	地域包括支援センター 北遠中央、地域包括 支援センター天竜	地域ケアマネージャー演習事業 テーマ：ケアマネジメントの基本制度改正点をふまえ 対 象：天竜区内の居宅介護支援事業所の ケアマネージャー	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
20	磐田ケアマネ連絡会	研修部会 テーマ：ソーシャルワーカーは 「どこに」一歩を踏み出すのか 対 象：磐田ケアマネ連絡会 所属ケアマネージャー	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
21	地域包括支援センター 細江	平成 27 年度 地域包括支援センター細江 ケアマネージャー演習事業研修 テーマ：「くらし」を支援するケアマネジメント 対 象：北区内事業所及び介護保険施設勤務の 介護支援専門員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
22	浜松市社会福祉協議会	平成 27 年度日常生活支援事業 全生活支援員研修会 テーマ：目の前の利用者にとどう向き合うか 一般勘定と専門職思考の狭間で 対 象：生活支援員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
23	浜松市障害保健福祉課	障害者虐待防止研修会 テーマ：豊かな支援関係を構築するために～「急がさ れる自己決定」と「意味のある自己決定」の狭間で～ 対 象：障害者福祉サービス事業従事者、 行政職員(福祉関係)	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授

No	主催	内容	担当
24	聖隷福祉事業団 聖隷ケアプランセンター和	相談支援を主たる業務とする職員向け研修指導者 育成研修 テーマ：スーパービジョンの理論と実際 対 象：法人内で相談支援を主たる業務とする者	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
25	浜松市中区長寿保険課	中区高齢者虐待防止研修会 テーマ：小さな気づき・早めの対応で高齢者虐待を 防ごう 対 象：浜松市中区所在の高齢者支援に関わる サービス事業所職員	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
26	社会福祉法人 慶成会	法人職員研修会 テーマ：精神疾患の基礎知識 対 象：慶成会 法人施設職員	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
27	高齢者相談センター 三方原（地域包括支援 センター三方原）	平成 27 年度 地域包括支援センター三方原 学習講演会 テーマ：地域介護支援専門員 演習事業事例検討会研修 対 象：地域介護支援専門員	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
28	高齢者相談センター 三方原（地域包括支援 センター三方原）	平成 27 年度地域包括支援センター三方原 地域かご支援専門員演習事業 テーマ：多分野の働きを知り支援に活かそう 対 象：北区内事業所及び介護保険施設勤務の 介護支援専門員	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
29	袋井市浅羽地区 認知症にやさしい地域を 創る会	職員研修会 テーマ：地域包括ケアを推進していく上で施設職員と して地域から求められる役割 対 象：袋井市浅羽地区 認知症にやさしい地域を創る会 所属職員	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
30	磐田市 健康福祉部福祉課	磐田市高齢者虐待防止ネットワーク委員を対象とする 研修会 テーマ：講話）虐待が起こる社会的背景・地域と 多職種の支援ネットワークの必要性を学ぶ グループワーク）磐田で出来る虐待防止ネットワーク 対 象：磐田市高齢者虐待防止ネットワーク会議委員	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
31	社会福祉法人 慶成会	法人職員研修会 テーマ：介護現場における介護職に必要な医療の知識 対 象：慶成会 法人施設職員	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
32	静岡県 ホームヘルパー連絡協議会	平成 27 年度静岡県ホームヘルパー連絡協議会 第 2 回サービス提供責任者研修会 テーマ：ヘルパーはどうやってスキルアップ・ステップ アップを図っていくべきか 対 象：サービス提供責任者、中堅ヘルパー等	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
33	一般社団法人 静岡県社会福祉士会	平成 27 年度介護福祉士ファーストステップ研修 テーマ：コミュニケーション技術の応用的な展開 対 象：基礎的業務に習熟し、資格修得後、実務 年数 2 年以上経過している者及び初任者研修を終了 している者	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授

No	主催	内容	担当
34	社会福祉法人 デンマーク牧場福祉会	施設研修「新人の育て方」 テーマ：介護において、新人を育てるコツなど 対 象：介護職員	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
35	一般社団法人 静岡県介護福祉士会	介護現場におけるプリセプター養成研修 テーマ：1 日目「プリセプターシップの理解」 「プリセプターとは」「プリセプターの役割と評価」 2 日目「プリセプターシップの評価票の作成」 「プリセプターシップのサポート体制について」 「アソシエートの役割」 対 象：介護職員	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
36	社会福祉法人 八生会	法人合同内部研修 テーマ：認知症介護～リスクマネジメントの観点より～ 対 象：八生会職員	社会福祉学部 介護福祉学科 杉山せつ子 講師
37	静岡県社会福祉協議会 静岡県 社会福祉人材センター	平成 27 年度中堅職員研修Ⅰ（西部） テーマ：「福祉サービスの実践Ⅱ」 「組織活動の自律的遂行」 対 象：静岡県西部地区福祉専門職	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
38	御前崎市 ケアマネージャー協議会	御前崎市ケアマネージャー協議会事例検討会 テーマ：介護支援専門職の資質向上を図るための 事例検討 対 象：御前崎市内介護支援専門員有資格者	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
39	静岡県社会福祉協議会 静岡県 社会福祉人材センター	平成 27 年度第 1 回福祉職員生涯研修課程 （新カリキュラム）指導者会議 テーマ：キャリアパス対応生涯研修課程導入について、他 対 象：平成 27 年度福祉職員研修課程指導者	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
40	静岡県社会福祉協議会 静岡県 社会福祉人材センター	平成 27 年度福祉職員生涯研修新任職員研修Ⅰ テーマ：福祉サービスの理念・動向と新任職員への 期待、新任職員の役割行動 対 象：静岡県中部地区福祉専門職	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
41	御前崎市 役所高齢者支援課	ケアマネジャー研修 テーマ：事例検討会・助言指導 対 象：居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
42	静岡県社会福祉協議会 静岡県 社会福祉人材センター	平成 27 年度第 2 回福祉職員生涯研修課程 （新カリキュラム）指導者会議 テーマ：キャリアパス対応生涯研修課程の概要 対 象：平成 28 年度福祉職員キャリアパス対応障害 研修課程指導者	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
43	社会福祉法人 みどりの樹	27 年度社会福祉法人みどりの樹法人内部研修会 テーマ：「組織人としてのスキルアップ、福祉職員と してのスキルアップ」自己評価への取り組みについて 対 象：社会福祉法人 みどりの樹職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
44	社会福祉法人 デンマーク牧場福祉会	特別養護老人ホーム ディアコニア 介護職員研修 テーマ：介護記録の書き方、認知症への対応 対 象：介護職員	社会福祉学部 介護福祉学科 佐野仁美 助教



No	主催	内容	担当
45	磐田市こども部幼稚園 保育園課	平成 27 年度主任会 テーマ：次につなげるための環境構成と援助の方法 を生み出す（講話、グループ協議） 対 象：磐田市公立幼稚園・こども園・保育園主任、 事務局職員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 太田雅子 教授
46	社会福祉法人十字の園	社会福祉法人十字の園 法人内研修十字の園大会 テーマ：「理念の継承」「地域の皆様と共に歩む私たち」 対 象：社会福祉法人十字の園 職員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 坂本道子 教授
47	浜松市教育委員会	平成 27 年度免許状更新講習 テーマ：幼児期における教育 対 象：幼稚園教諭、保育教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木まき子 准教授
48	浜松市教育委員会	平成 27 年度 保育活動研修 テーマ：発育発達過程に沿った運動遊びの支援 対 象：幼稚園教員、小・中学校教員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 和久田佳代 准教授
49	浜松市 リハビリテーション病院	栄養・褥瘡対策委員会 勉強会 テーマ：褥瘡対策に関するベッド上のポジショニング 対 象：全職種病院スタッフ	リハビリテーション学部 理学療法学科 有蘭信一 准教授
50	医療法人光生会 赤岩病院	臨床実習におけるクリニカルラダーシップ勉強会 テーマ：臨床実習におけるクリニカルラダーシップ 勉強会（基礎編） 対 象：赤岩病院理学療法士スタッフ （臨床実習指導者）	リハビリテーション学部 理学療法学科 有蘭信一 准教授
51	公立森町病院	臨床実習におけるクリニカルラダーシップ勉強会 テーマ：臨床実習におけるクリニカルラダーシップ 勉強会（応用編） 対 象：公立森町病院リハビリスタッフ （臨床実習指導者）	リハビリテーション学部 理学療法学科 根地嶋 誠 准教授
52	一般社団法人 静岡県理学療法士会	教育局 新人教育部 新人教育プログラム テーマ：B-2「クリニカルリーズニング」 対 象：理学療法士	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
53	公立森町病院	臨床実習におけるクリニカルラダーシップ勉強会 テーマ：臨床実習におけるクリニカルラダーシップ 勉強会（基礎編） 対 象：公立森町病院リハビリスタッフ （臨床実習指導者）	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
54	医療法人光生会 赤岩病院	臨床実習におけるクリニカルラダーシップ勉強会 テーマ：臨床実習におけるクリニカルラダーシップ勉強会 （応用編） 対 象：赤岩病院理学療法士スタッフ （臨床実習指導者）	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
55	一般社団法人 静岡県理学療法士会	教育局 新人教育部 新人教育プログラム テーマ：B-3「統計方法論」 対 象：理学療法士	リハビリテーション学部 理学療法学科 金原一宏 助教

No	主催	内容	担当
56	公立森町病院	臨床実習におけるクリニカルラダーシップ勉強会 テーマ：実際の臨床実習現場の実践に基づいた内容 (実践編) 対 象：公立森町病院リハビリスタッフ (臨床実習指導者)	リハビリテーション学部 理学療法学科 坂本飛鳥 助教
57	医療法人光生会 赤岩病院	臨床実習におけるクリニカルラダーシップ勉強会 テーマ：実際の臨床実習現場の実践に基づいた内容 (実践編) 対 象：赤岩病院理学療法士スタッフ (臨床実習指導者)	リハビリテーション学部 理学療法学科 坂本飛鳥 助教
58	浜松市教育研究会 発達支援教育研究部	浜松市教育研究会発達支援教育研究部 第3回研修会 テーマ：気になる子供の理解と支援について 対 象：発達支援教育研究部 通級指導部員(16校)	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
59	静岡県立 浜松特別支援学校	特別支援教育講座 テーマ：作業療法の視点から考える支援 ～タイプに応じた支援方法の基本～ 対 象：教員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
60	静岡大学	静岡大学教員免許状更新講習 テーマ：作業療法からみた発達障害の理解と支援について 対 象：県内の現職教員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
61	浜松市根洗学園	幼稚園保育園等支援者学習会 テーマ：感覚統合の基本的知識とその実践 対 象：教員と保育士	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
62	静岡県 西部健康福祉センター	平成27年度第2回高次脳機能障害西部地区 業務連絡会(研修会) テーマ：高次脳機能障害者の就労支援サービス 事業所に期待されること 対 象：西部地区行政担当者、西部地区の総合病院・ 精神科病院・リハビリテーション科病院、神経内科 病院の相談員等、西部地区の相談支援事業所、 サービス事業所(就労継続支援A型、B型、就労 以降支援等)	リハビリテーション学部 作業療法学科 建木 健 助教
63	浜松市 リハビリテーション病院	平成27年度臨床実習研修会 テーマ：作業療法士からみた臨床指導実習について 対 象：浜松市リハビリテーション病院 PT/OT/ST	リハビリテーション学部 作業療法学科 中島ともみ 助教
64	静岡県 言語・聴覚・発達障害 教育研究会	静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会担当者研修会 テーマ：幼児期及び学齢期の吃音の指導や支援について 対 象：通信指導教室及び幼児ことばの教室担当者	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 谷 哲夫 准教授
65	聖隷福祉事業団 こうのとり保育園	言語検査についての職員研修会、言語検査 テーマ：年中児の言語検査、職員への検査説明 対 象：検査対象)年中児(4歳児)25名 研修)看護師1名、保育士20名	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 中村哲也 助教

## 2 一般の方対象

No	主催	内容	担当
1	浜松市 精神保健福祉センター	平成 27 年度 子どものこころの健康づくり ワーキング会議 テーマ：平成 27 年度事業実施状況、意見交換、 平成 28 年度事業計画 対 象：事業実施校、 子どものメンタルヘルスサポーター、 思春期メンタルヘルス推進検討会、 教育委員会等の関係者	看護学部 篁 宗一 教授
2 ～ 32	(30 件) 浜松市教育委員会 2 件 浜松市立入野小学校 浜松市立浜北北部中学校 浜松市立富塚小学校 浜松市立北浜東部中学校 浜松市立三ヶ日東小学校 静岡市立北沼上小学校 浜松市立富塚西小学校 磐田市立竜洋北小学校 浜松市立八幡中学校 浜松市立都田南小学校 浜松市立籠玉小学校 浜松市立伊目小学校 浜松市立都田小学校 浜松市立三方原中学校 浜松市立三方原小学校 浜松市立芳川小学校 浜松市立南の星小学校 浜松市立豊岡小学校 浜松市立都田中学校 浜松市立西気賀小学校 浜松市立瑞穂小学校 浜松市立中郡小学校 浜松市立大瀬小学校 浜松市立佐鳴台小学校 浜松市立八幡中学校 浜松市立細江中学校 島田市立島田第一中学校 函南町立函南中学校	県内小中学校で実施する健康教育の講演会  テーマ：メディアと上手につき合おう、 大人の世界に羽ばたく君たちへ、 自分と相手を大切にすることの大切さ、 なぜいじめはおきるのか ～よりよいコミュニケーションについて学ぼう～、 思いを上手に伝えよう、思春期の心と体 等 対 象：小学 5～6 年生、小学校 1 年生の保護者、 中学 1～3 年生、教職員、PTA 本部役員、 PTA 保健体育部員、学校医、学校薬剤師、 保護者 等	看護学部 伊藤純子 助教 高橋佐和子 助教
33	浜松市立 引佐北部小中学校	学校保健委員会 テーマ：めざめスッキリ！スマイルいっぱい！ 対 象：児童・生徒（5～9 年生）、職員、地域・ 保護者	看護学部 高橋佐和子 助教
34	磐田市 民生委員児童委員協議会	民生委員・児童委員を対象とする研修会 テーマ：地域における福祉活動の進め方 対 象：磐田市民児協地域福祉部会の民生委員・ 児童委員	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
35	浜松市社会福祉協議会 浜松地区センター	平成 27 年度福祉教育担当者連絡会 テーマ：福祉教育に込められる意味と地域福祉への 発展 対 象：浜松市中区、南区の小中学校のボランティア 及び福祉教育担当の先生	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授

No	主催	内容	担当
36	浜松市社会福祉協議会 浜松地区センター	平成 27 年度福祉教育担当者連絡会 テーマ：「福祉教育に込められる意味と地域福祉への発展」 対 象：浜松市中区、南区の小中学校のボランティア及び福祉教育担当の先生	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
37	磐田市 民生委員児童委員協議会	民生委員・児童委員を対象とする研修会 テーマ：地域における福祉活動の進め方 対 象：磐田市民児協地域福祉部会の民生委員・児童委員	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
38	浜松市 浜松手をつなぐ育成会	青少年福祉ボランティアリーダー育成研修会 テーマ：思春期・青年期のメンタルヘルス 対 象：高校生以上の学生	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
39	浜松市 精神保健福祉センター	平成 27 年度 子どものこころの健康づくり ワーキング会議 テーマ：平成 27 年度事業実施状況、意見交換、平成 28 年度事業計画 対 象：事業実施校、子どものメンタルヘルスサポーター、思春期メンタルヘルス推進検討会、教育委員会等の関係者	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
40	社会福祉法人 菊川市社会福祉協議会	ひきこもりを抱える家族支援セミナー テーマ：ひきこもりの理解と支援 ～ささいなことから始めてみよう～ 対 象：家族・民生委員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
41	浜松市 発達医療総合 福祉センター 地域活動支援センター 「オルゴール」	教室 テーマ：「合理的配慮」について 対 象：「オルゴール」の利用者	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
42	浜松市中区 民生委員児童委員協議会	高齢者福祉部会研修 テーマ：「ひとり暮らし高齢者が抱える不安をどう支えるか」 対 象：中区民生委員児童委員	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
43	静岡県 (特定非営利活動法人 浜松 NPO ネットワーク センター)	「障害者の就労と雇用を支援する人のための研修 2015 静岡県ジョブコーチ養成研修」 テーマ：精神障害の特性と職業的課題 対 象：県内在住で障害のある人の就労・雇用支援をする人、関心のある人等	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
44	特定非営利活動法人 しずおか・子ども家庭 プラットフォーム	浜松・子ども臨床事例検討会 テーマ：子どもの貧困について 対 象：浜松地区における子どもと家庭の支援者	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
45	介護・医療と社会保障を 考える市民の会	介護政策にかかわる学習講演会 テーマ：今、介護現場で何か起きているのか 対 象：市民	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
46	社会福祉法人 富士市社会福祉協議会	市民後見人養成研修 テーマ：市民後見概論 対 象：富士市民	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授



No	主催	内容	担当
47	社会福祉法人十字の園 アドナイ館	区民公開講座 テーマ：認知症と向き合う ～ともに穏やかな人生を送るために～ 対 象：浜松市北区民	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
48	掛川市 西山口地区福祉協議会	定期総会一講演会 テーマ：人生は一度きり！ すべっても一生懸命 対 象：西山口地区福祉協議会役員、 ボランティア委員等	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
49	磐田市 民生委員児童委員協議会	高齢者福祉部会全体研修 テーマ：在宅医療と介護の連携について 対 象：磐田市民生委員児童委員高齢者福祉部会委員	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
50	静岡県 健康福祉部福祉長寿局	有識者懇談会での意見交換 テーマ：より良い高齢者ケアを考える有識者懇談会 対 象：有識者、県庁職員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
51	浜松市天竜協働センター	レディースセミナー・健康講座 テーマ：認知症にかからない心の持ち方 対 象：レディースセミナー受講生	社会福祉学部 介護福祉学科 佐野仁美 助教
52	静岡県 健康福祉部 こども未来課	子育て支援員研修 テーマ：基本⑤対人援助の価値と倫理 対 象：子育て支援員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 坂本道子 教授
53	一般財団法人 日本老人福祉団 浜松ゆうゆうの里	講演会 テーマ：こころのケアと健康について 対 象：浜松ゆうゆうの里入居者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 藤田美枝子 教授
54	公益財団法人 浜松こども園	保護者会総会 講話 テーマ：こどもの養育を考える ～子ども虐待の予防は発達を理解することから～ 対 象：障がい児を持つ親、施設職員、一般の方	社会福祉学部 こども教育福祉学科 藤田美枝子 教授
55	学校法人浜松平和学園	家庭教育講座 テーマ：子供の育ちや親の役割等、 幼児期の子育てについて 対 象：各幼稚園の年中児保護者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木まき子 准教授
56	浜松市教育委員会	家庭教育講座 テーマ：「6歳の力を信じて ～生まれてきた子供はみんな幸せに！」 対 象：浜松市立与進小学校 次年度入学予定児童保護者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木まき子 准教授
57	浜松市教育委員会	平成27年度 家庭教育講座 テーマ：「子供の学ぶ力を育むために」 対 象：浜松市立伊目小学校 次年度入学児童保護者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 細田直哉 助教
58	浜松市健康福祉部	呼吸器教室 テーマ：呼吸器の実技指導Ⅰ / Ⅱ 対 象：一般市民	リハビリテーション学部 理学療法学科 有蘭信一 准教授

No	主催	内容	担当
59	老人福祉センター萩原荘	転倒予防教室（元気はつらつ教室） 高齢者の運動機能低下及び認知症予防指導 テーマ：高齢者の運動機能低下及び認知症に対する 予防指導 対 象：地域の高齢者	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
60	静岡県立 浜松特別支援学校 （磐田分校）	特別支援教育における専門職の訪問事業 テーマ：児童生徒の状況を把握・教員へ助言 対 象：教員と児童生徒	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
61	静岡県立 浜松特別支援学校	特別支援教育 テーマ：特別支援教育における専門職の訪問事業 対 象：児童生徒、教員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
62	浜松市根洗学園	子育て支援 保護者支援講座 テーマ：からだの発達と関わり方 対 象：保護者	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
63	NPO 法人 Harmony	職員研修会 テーマ：入浴介助法と身体作り、事例検討 対 象：NPO 法人 Harmony スタッフ	リハビリテーション学部 作業療法学科 鈴木達也 助教
64	特別養護老人ホーム 浜松十字の園	デイサービス、ショートステイ利用者の家族会 テーマ：認知症の症状と関わり方について、 腰痛予防体操 対 象：デイサービス、ショートステイ利用者の家族	リハビリテーション学部 作業療法学科 鈴木達也 助教
65	西区民生委員・ 児童委員協議会	西区民生委員・児童委員協議会 高齢者サロンボランティアネット研修会 テーマ：健康を維持するための体操指導 対 象：西区でサロンボランティアネットに関わっ ている方	リハビリテーション学部 作業療法学科 建木 健 助教
66	浜松市障害保健福祉課	手話奉仕員養成講座入門課程講義 テーマ：聴覚障害の基礎知識 対 象：受講者	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 石津希代子 准教授
67	浜松言友会	第3回青少年のための吃音講座 テーマ：吃音に関する情勢報告 対 象：吃音に悩む人たちやその家族、吃音や言友 会に関心のある方、吃音治療支援者	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 谷 哲夫 准教授

## 4. 保健医療福祉団体の委員等派遣

※合計 31 件／担当教員の所属・職位は 2015 年当時

No	内容	担当
1	聖隷三方原病院倫理委員会 外部委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 毎月 1 回開催 主催：社会福祉法人 聖隷福祉事業団 総合病院 聖隷三方原病院	看護学部 森 一恵 教授
2	はままつ人づくり未来プラン検討委員会 専門委員 任期：2015 年 5 月～2016 年 3 月 主催：浜松市教育委員会	看護学部 成松美枝 准教授
3	はままつの教育推進会議 専門委員 任期：2015 年 5 月～2016 年 3 月 主催：浜松市教育委員会	看護学部 成松美枝 准教授
4	第 3 者委員会 委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人十字の園	看護学部 野崎玲子 准教授
5	事務事業評価 外部評価委員会 委員 日程：2015 年 9 月 2 日 (水) 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 教授
6	浜松市子ども・若者支援スーパーバイザー 任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
7	浜松市就学支援委員会 委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：浜松市教育委員会 学校教育部	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
8	「適応指導教室」スーパーバイザー 任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 主催：浜松市不登校児支援協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
9	浜松市不登校児支援協議会 会長 任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 主催：浜松市教育委員会 指導課	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
10	浜松市社会福祉協議会日常生活自立支援事業契約締結審査会 委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
11	磐田市障害者施策推進協議会 委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：磐田市健康福祉部健康福祉課	社会福祉学部 社会福祉学科 川向雅弘 准教授
12	浜松市発達医療総合福祉センター苦情解決第三者委員会 委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人浜松市社会福祉事業団	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
13	聖隷厚生園 第三者委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人聖隷福祉事業団	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
14	第三者委員会 委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人復泉会	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授

No	内容	担当
15	平成 27 年度浜松市支援者支援事業連絡会 若者支援スーパーバイザー 任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
16	浜松市営住宅管理運営委員会 委員 任期：2015 年 7 月 1 日～2017 年 6 月 30 日 主催：浜松市都市整備部住宅課	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
17	運営推進会議 委員 日程：2015 年 4 月 24 日(金) 主催：社会福祉法人慶成会 グループホーム花みずき	社会福祉学部 社会福祉学科 村上武敏 助教
18	浜松市社会福祉審議会 委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
19	浜松市ユニバーサルデザイン審議会 委員 任期：2015 年 4 月～2017 年 3 月 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
20	平成 27 年度浜松市障害者虐待防止対策支援事業 アドバイザー 任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
21	和合愛光園初生サテライト 運営推進会議 委員 任期：2015 年 6 月～原則 2 ヶ月に 1 回 主催：社会福祉法人 聖隷福祉事業団 特別養護老人ホーム 和合愛光園	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
22	介護・医療連携推進会議 構成委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人 七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 教授
23	社会福祉法人 昴会 監事 任期：2014 年 10 月 1 日～2016 年 9 月 30 日 主催：社会福祉法人 昴会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
24	社会福祉法人和光会 第三者委員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人和光会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
25	社会福祉法人みどりの樹 法人評議員 任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日 主催：社会福祉法人みどりの樹	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
26	特定非営利活動法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 監事 任期：2015 年 6 月 27 日～2017 年 6 月 26 日 主催：特定非営利活動法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
27	社会福祉法人七恵会 法人評議員 任期：2015 年 6 月 30 日～2017 年 6 月 29 日 主催：社会福祉法人七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
28	第三長上苑運営推進会議 委員 任期：2015 年 7 月 1 日～2017 年 6 月 30 日 主催：社会福祉法人七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教

No	内容	担当
29	平成 27 年度 社会福祉法人の公益的活動検討会 委員 任期：2015 年 8 月 10 日、10 月 28 日、2016 年 1 月 主催：社会福祉法人静岡県社会福祉協議会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
30	平成 27 年度浜松市支援者支援事業連絡会 若者支援スーパーバイザー 任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 主催：浜松市	社会福祉学部 こども教育福祉学科 藤田美枝子 教授
31	浜松言友会 会長 任期：2016 年 1 月 1 日～12 月 31 日 主催：浜松言友会（ボランティア団体）	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 谷 哲夫 准教授

## 5. 研究支援

※合計 12 件／担当教員の所属・職位は 2015 年当時

No	内容	担当
1	磐田市立総合病院 看護研究指導 研究に取り組むメンバーとの意見交換、研究方法や進め方に対する助言、 看護研究講義 等 日程：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日（年 6 回） 場所：磐田市立総合病院	看護学部 渡邊順子 教授
2	独立行政法人労働者健康福祉機構 浜松労災病院 看護部研究指導・講義 看護研究指導：看護研究の基本レクチャー、研究テーマの絞り込み 看護研究講義：「看護研究ガイダンス」、「文献のクリティーク」 日程：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 場所：浜松労災病院	看護学部 渡邊順子 教授
3	医療法人社団種光会 朝山病院看護研究 指導・講評 朝山病院院内研究指導および看護研究発表の講評 日程：2015 年 5 月 19 日（火）、8 月 25 日（火）、10 月 27 日（火）、 2016 年 2 月 23 日（火） 場所：朝山病院	看護学部 清水隆裕 助教
4	社会福祉法人小羊学園 2015 年度研究発表会 外部審査委員 研究発表への講評 日程：2016 年 2 月 20 日（土） 場所：聖隷クリストファー大学	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
5	社会福祉法人聖隷福祉事業団厚生園 聖隷厚生園学会 審査員 第 9 回聖隷厚生園学会 研究発表会審査員 日程：2015 年 10 月 17 日（土） 場所：聖隷厚生園信生寮まじわりの家	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
6	社会福祉法人聖隷福祉事業団浜名湖エデンの園園内学会 審査員 職員による研究発表会の審査員 日時：2015 年 11 月 6 日（金） 場所：浜名湖エデンの園	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
7	社会福祉法人聖隷福祉事業団厚生園 第 14 回聖隷福祉学会 審査員 研究発表会の審査員 日時：2016 年 2 月 27 日（土） 場所：アクトシティ浜松コンgresセンター	社会福祉学部 介護福祉学科 古川和稔 教授
8	社会福祉法人小羊学園 2015 年度研究発表会 外部審査委員 研究発表への講評 日程：2016 年 2 月 20 日（土） 場所：聖隷クリストファー大学	社会福祉学部 介護福祉学科 佐々木正和 助教
9	社会福祉法人聖隷福祉事業団 聖隷保育学会中間報告会・聖隷保育学会 実践研究発表に対する指導・助言 日時：2015 年 8 月 29 日、2016 年 1 月 23 日 場所：聖隷こども園わかば、こうのとり豊田保育園	社会福祉学部 こども教育福祉学科 太田雅子 教授
10	社会福祉法人愛光会 ハロー保育園での実践研究 アドバイザー 実践研究アドバイス 日程：2015 年 8 月 6 日（木） 場所：ハロー保育園	社会福祉学部 こども教育福祉学科 鈴木まき子 准教授



No	内容	担当
11	第 20 回静岡県理学療法士学会 座長 演題発表および討論の活性化、一般口述 8 日程：2016 年 6 月 18 日(土)～6 月 19 日(日) 場所：ふじのくに千本松フォーラム プラサ ヴェルデ	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延 准教授
12	浜松市根洗学園 療育研究 講師 「療育と専門的連携」 日時：2015 年 5 月～2016 年 3 月 場所：浜松市根洗学園	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授

## 6. 資料

### 1 ニュースレター第7号(年1回発行)

発行： 2015年6月 13,000部

内容： ・センター長挨拶「情報発信と政策形成への貢献を強化」

・地域と歩む研究紹介 「発達障がい児への余暇支援と保護者への子育て支援の取り組み」  
「浜松市における成年後見制度利用状況と市民後見人養成のニーズについて  
～地域の特性を生かした成年後見制度の活用～」

・地域と歩む活動紹介 園芸療法の実践にむけて はままつフラワーパークとの協働

・保健医療福祉団体の委員等派遣状況、研究支援実施状況

・2015年度公開講座のご案内

・2015年度地域貢献事業研究費 採択研究一覧

配布先：実習施設、就職施設、聖隷グループ、卒業生、同系他大学、臨床教授等、市内図書館・協働センターなど

### 2 チラシ制作

#### 1. 公開セミナー・公開講座の案内

種類	講座タイトル
公開セミナー	対人援助の現場で活かすリーダーシップを磨こう ～コーチ型リーダーシップを身につけよう!
公開セミナー	講演：「発達障がい児者の家族支援の効果と課題」 シンポジウム：「家族会活動の過去・現在・未来」
公開講座	認知症対応セミナー ～はじめの一步～ (連続2回) ※ 講座1) 認知症の初期症状を持つ方々への対応のありかた ～介護者の体験している世界、眺めている風景に焦点を当てて～ 講座2) 「社会資源の紹介」と「アロマを用いた手浴・ハンドマッサージの紹介」
公開講座	一部：労働人口激減社会で生じているメンタルヘルス問題の現状 ～職場でできることから～ 二部：職場におけるメンタルヘルス 自己コントロール獲得へのヒント

※浜松市からの依頼による「うごく&スマイル」(貯めよう!健康ポイント)に参加しました。



## 2. 2015 年度地域貢献事業研究報告会の案内

### 3 専任教員が大会長等になっている学術大会等への協力・後援

学術大会等	大会長等	日程
第 1 回聖隷リハビリテーションセミナー -呼吸リハ心臓リハ編-	有菌 信一 リハビリテーション学部准教授	2015 年 11 月 22 日
2015 じゃんだらに with あ〜と de い〜ら	佐々木 正和 社会福祉学部助教	2015 年 6 月 13 日
第 19 回作業科学セミナー	小田原 悦子 リハビリテーション学部教授	2015 年 11 月 29 日
第 41 回全国助産師教育協議会 全国研修会	久保田 君枝 助産学専攻科教授	2016 年 3 月 6 日

### 4 ホームページの更新

URL:<http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/>

大学ホームページ (<http://www.seirei.ac.jp/>) ⇒社会との連携⇒保健福祉実践開発研究センターからリンクしています。



地域と歩む

聖隷クリストファー大学

**保健福祉実践開発研究センター**

Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare



---

**カテゴリ**

ニュース

ウェブページ

保健福祉実践開発研究センター概要

講師・委員等の派遣

保健福祉実践開発研究センターへの依頼

地域貢献の研究紹介

公開セミナー・市民公開講座

リンク

聖隷歴史資料館

聖隷クリストファー中・高等学校

クリストファーこども園

聖隷クリストファー大学

2015年9月7日(金)

**2015年度一般市民向け公開講座のご案内**

聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター主催による  
2015年度一般市民向け公開講座についてお知らせいたします。

.....

一般市民向け公開講座

タイトル: **認知症対応セミナー ～はじめての一步～**



日時: 第1回 2015年9月17日(木) 13:30～15:00

第2回 2015年9月26日(土) 13:30～15:30

会場: 聖隷クリストファー大学 3号館1階

《第1回: 9月17日(木)》

「認知症の初期症状を持つ方々への対応のありかた ～介護者の体験している世界、眺めている風景に焦点を当てて～」

講師: 聖隷クリストファー大学  
看護学部教授 入江 拓

家族が認知症になり、自分が介護を担わなくてはならない立場に置かれたら、一体何ができるのでしょうか。向よりも介護者としての自分は、戸惑いや不安を抱えながら、現実状況とどのように折り合いをつけながら自身の人生を生きてゆくのでしょうか。共に成長しつつ生きるために、具体的な方法を交えつつ、本人と家族を取り巻く環境と、それらを捉える視座から考えます。

《第2回: 9月26日(土)》

「社会資源の紹介」と「アロマを用いた手浴・ハンドマッサージの紹介」

講師: Aromatherapy 凛灯 アロマセラピスト 大石 恵美子 氏

身近な方の ちょっと気になる行動で悩んだりイライラしたりすることがありませんか？お互いのイライラは相乗効果となって悪循環を招きます。そのような時に活用できるアロマを用いた手浴やハンドマッサージの仕方をご紹介します。

講師: 聖隷クリストファー大学 看護学部看護学科准教授 入江 晶子

26

## 1. 更新ページ

- ・地域貢献事業研究  
2015 年度地域貢献事業研究費採択課題一覧を掲載
- ・公開セミナー・公開講座  
2015 年度公開講座案内を掲載、インターネット申込フォーム

## 2. 当センターへの問い合わせ方法

ホームページに問い合わせフォームを設置していますので、ぜひご利用ください。

URL : <http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/form.html>

カテゴリ	保健福祉実践開発研究センターへの依頼
ニュース	共同研究事業へのご参加や、研究支援、講師派遣、専門団体等への委員の派遣等のご相談は、下記にご連絡いただくか、申込フォームから送信してください。
ウェブページ	聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター 〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL:053-439-1400 FAX:053-439-1406 <a href="http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/">http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/</a>
保健福祉実践開発研究センター概要	
保健福祉実践開発研究センターの取り組みの方針	
講師・委員等の派遣	
<b>保健福祉実践開発研究センターへの依頼</b>	
地域貢献の研究紹介	
公開セミナー・市民公開講座	
リンク	
聖隷歴史資料館	
聖隷クリストファー中・高等学校	
クリストファーこども園	
聖隷クリストファー大学	

貴団体名	<input type="text"/>
担当部署	<input type="text"/>
担当者名	<input type="text"/>
郵便番号	<input type="text"/>
都道府県	静岡県 ▼
住所	<input type="text"/>
電話番号	<input type="text"/>
FAX番号	<input type="text"/>
メールアドレス	<input type="text"/>
	(確認)
分類	<input type="checkbox"/> 共同研究事業 <input type="checkbox"/> 研究支援 <input type="checkbox"/> 審議会等委員の推薦 <input type="checkbox"/> その他 <input type="checkbox"/> 講師派遣
依頼内容	詳細 (希望日時・期間、分野、人数等) <input type="text"/>
入力内容確認	リセット

電話でのお問い合わせ先：053-439-1400 (大学代表)



聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare



地域と歩む



ニュースレター  
2015.6

Vol.07

# NEWS LETTER

## CONTENTS

- 01 保健福祉実践開発研究センター長挨拶  
地域貢献事業研究費2015年度報告会のご案内
- 02 “地域と歩む”地域貢献事業研究の紹介
  - ・『発達障がい児への余暇支援と保護者への子育て支援の取り組み』
  - ・『浜松市における成年後見制度利用状況と市民後見人養成のニーズについて  
～地域の特性を生かした成年後見制度の活用～』
- 03 “地域と歩む”地域貢献活動の紹介
  - 『園芸療法の実践にむけて はままつフラワーパークとの協働』
  - 保健医療福祉団体の委員等派遣状況、研究支援実施状況
- 04 2015年度公開講座のご案内／2015年度地域貢献事業研究費採択一覧

## 情報発信と政策形成への貢献を強化

聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター長  
社会福祉学部社会福祉学科准教授

大場 義貴



聖隷クリストファー大学では、建学の精神であるキリスト教精神による「生命の尊厳と隣人愛」に基づき、保健医療福祉の総合大学として人材育成を行っています。2009年に設置されました本センターは、保健医療福祉分野に関する知的資源を地域に還元し、地域の保健医療福祉の質の向上に寄与することを基本目標としております。そのために今年度の目標を、1) 地域との共同事業・研究の組織的推進 2) 地域のニーズに応じた大学の情報・知識・技術の共有化の推進 3) 地域の保健医療福祉分野の政策形成への参画とし、従来に引き続き公開講座や地域貢献研究を実施すると共に、新規にホームページにてわかりやすく研究成果を報告することや、浜松市の関係部署と連携して地域の保健医療福祉分野の政策形成に貢献することを推進して参ります。

是非皆様に、本センターの諸活動をご活用頂き、地域とあゆむセンターとして、発展させて参りたいと思いますので、よろしくお願い致します。

### 保健福祉実践開発 研究センターとは？

「地域と歩む」をキーワードに、保健医療福祉の実践現場との共同研究・共同事業、地域の専門職向けの研修や一般市民の方々への学習機会の提供、地域の自治体や専門分野に関わる団体への協力、地域に開かれた相談窓口等を通して、地域の保健医療福祉のさらなる質の向上に寄与するための活動に取り組んでいます。

## 地域貢献事業研究報告会のご案内

2014年度に地域貢献事業研究費の採択を受けた事業研究6件のポスター発表を下記の通り開催します。聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催です。ぜひお立ち寄りください。

**日時** 2015年11月7日(土) 10:00～15:00(予定)

**場所** 聖隷クリストファー大学

※詳細は保健福祉実践開発研究センターのホームページ等でご案内いたします。



2014年度報告会の様子

## 地域と歩む 地域貢献事業研究の紹介

Research



当センターでは、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として「地域貢献事業研究費」を配分しています。2014年度に採択された研究の中から2件をご紹介します。



### 発達障がい児への余暇支援と保護者への子育て支援の取り組み

【研究代表者】  
リハビリテーション学部作業療法学科

准教授 伊藤 信寿

共同研究者の所属先	真鍋智美(根洗学園)、野島いずみ(根洗学園)、長谷美智代(合同会社MiMoチルコロ)
対象地域	浜松市

発達障がいの中には、光や音に過剰反応し落ち着かない子どもや、物や人との接触を避けるような防衛反応を示す子ども、ボタンや紐の触感がわかりにくく、ボタンや靴ひもが苦手といった不器用な子どもたちがいます。さらには、高さやスピードに対して非常に鈍麻なため、高所のような危険な場所に行きたがる、過剰に動き回るなど、感覚情報処理機能が未熟なために、問題行動を引き起こしている子どもが少なくないです。このような子どもに対して、遊具等を使用して楽しめる感覚を提供することにより、子どもの感覚情報処理機能の成熟を促し、苦手な部分を育てていくことを目的としたものが感覚統合です。今回の研究では、子どもの長期休暇時における余暇支援として感覚統合に基づいた活動を行った結果、感覚反応に若干の改善があり、子どもの行動やそれに対する保護者の認識に変化を確認できました。今後、発達障がいの子どものために、感覚統合に基づいた活動に気軽に参加できる、あるいは集うことができる場の提供を検討していきたいと思っております。



### 浜松市における成年後見制度利用状況と市民後見人養成のニーズについて ～地域の特性を生かした成年後見制度の活用～

【研究代表者】  
社会福祉学部

教授 横尾 恵美子

共同研究者の所属先	高木誠一(社会福祉法人光の園浜松協働学会)、堂元京子(独立型社会福祉士事務所ライフサポートゆい)、杉浦芳江(地域包括支援センター芳川)
対象地域	浜松市

障がいがあっても高齢になっても住み慣れた地域で暮らし続けることができる。…そんな地域社会を作っていくために私たちは何ができるか?という思いから、福祉・法律・医療の仲間たちと一緒にNPO法人浜松成年後見センターを2年前に設立しました。成年後見制度とは判断力が衰えてきた人のサポートをする制度です。これからの社会には必要不可欠な制度なのですが、一般の方たちには後見制度の理解や有益性が十分には伝わっていない感があります。それで、私は2014年度の地域貢献事業研究費の助成を受け、浜松市における成年後見制度利用状況と市民後見人養成のニーズについて調査研究を行いました。浜松市全域の地域包括支援センターに協力をいただき調査をしたのですが、社会福祉専門職である介護支援専門員ですら、認知症を患った方や障がいのある方にどの時点で成年後見制度の利用を勧めたらよいかの判断が難しいという回答を多数いただきました。



認知症を患っている方や知的障がい者、精神障がい者等が消費者被害や詐欺等に気づかずに安心して暮らしていただけるように、これからも地域サポート力を高める実践研究活動に取り組んでいきたいと考えています。



## 地域と歩む

## 地域貢献活動の紹介

Activity



# 園芸療法の実践にむけて はままつフラワーパークとの協働

リハビリテーション学部作業療法学科 助教 建木 健・助教 藤田 さより

はままつフラワーパークでは、四季おりおりの花が咲き誇る広大な園内で、花や緑を楽しむだけでなく、園芸療法士の育成や心と体のリハビリに役立てたいという新たな取り組みをスタートしています。そこで、本学リハビリテーション学部作業療法学科では、はままつフラワーパークからの依頼を受け、本学の学生たちのボランティア活動とも連携しながら意見交換を行っています。



学生と共にフラワーパークを視察後に、フラワーパーク職員と意見交換を行いました。初めてフラワーパークを訪れる学生もおり、改めて魅力を感じたようです。意見交換会では、園芸を通して障がい者や高齢者がこのフラワーパークで如何に健康に関与できるのか、どうしたら高齢者や障がい者が園芸に参加できるのかといったディスカッションが行われました。フラワーパークでは福祉施設の方が働く場が設けられているなど作業療法の視点から園芸の効果や障がい



左から建木助教、藤田助教

者が働くことへの助言等を含め、学生とともに関わっていただきたいと思います。

現在は、学生が中心となってイベントでの車いす押し隊、受付、絵本の読み聞かせ等さまざまな形でフラワーパークでのボランティア活動に積極的に参加しています。

今後は学生や大学からの発信型でのイベント開催などを企画し、教員の関わり方を学生に見てもらい、共に参加することによって地域での医療福祉をお互いに学べる機会になることを望んでいます。



## フラワーパーク担当者からの声

学生とのコラボレーションを通してフラワーパークを知っていただき、身近の存在に感じてほしいと思い活動を始めました。また、学生との話し合いを重ね子供から大人まで楽しめる公園づくりを進めたいと考えています。

## 本学の教員は、保健医療福祉の専門分野の委員等として地域に貢献しています。

### 保健医療福祉団体の委員等派遣状況

浜松市介護認定審査会  
 浜松市国民健康保険運営協議会  
 静岡県医療審議会  
 浜松市精神保健福祉審議会  
 社会福祉法人七恵会 評議員  
 社会福祉法人みどりの樹 評議員  
 浜松十字の園・アドナイ館・第2アドナイ館 第三者委員  
 NPO法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 監事  
 浜松市ユニバーサルデザイン審議会 委員  
 浜松市営住宅管理運営委員会 委員  
 浜松市社会福祉審議会および福祉有償運送運営協議会 委員  
 日常生活自立支援事業契約締結委員会  
 浜松市不登校児童支援協議会 会長および適応指導教室スーパーバイザー  
 浜松市障害者虐待防止対策支援事業 アドバイザー  
 平成26年度静岡県専任教員養成講習会実行委員会 委員  
 牧之原市健康づくり推進協議会 委員  
 浜松市障害者施策推進協議会 委員  
 平成26年度浜松市発達障害児者支援体制整備検討委員会 委員

総合支援検討会・勉強会 アドバイザー  
 平成26年度子ども・若者支援スーパーバイザー  
 浜松の精神保健福祉を考える官民協働ワーキンググループ アドバイザー  
 地域密着型介護老人福祉施設和合愛光園和合サテライト運営推進会議 委員  
 第三長上苑主催運営推進会議 委員  
 浜松市福祉人材バンク運営委員会 委員  
 浜松市地域包括支援センター運営協議会 委員  
 浜松市社会福祉審議会児童福祉専門分科会 委員  
 地域貢献推進部会 (CSW研修ワーキンググループ) アドバイザー  
 静岡県福祉サービス第三者評価推進委員会 委員  
 浜松市高齢者虐待防止支援事業 アドバイザー  
 NPO法人 遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 (E-jan) 法人役員 監事  
 浜松市人権施策推進審議会 委員

### 研究支援実施状況

日本健康科学学会第30回学術大会 学術大会長  
 聖隷厚生園学会 審査員  
 浜名湖エデンの園園内学会 審査員  
 社会福祉法人小羊学園 平成26年度法人内研究発表会 外部審査委員  
 平成26年度 福祉職員生涯研修課程指導者会議 指導者

講師の派遣依頼は、保健福祉実践開発研究センターホームページの専用フォームをご利用ください。

大学ホームページ  
<http://www.seirei.ac.jp>

保健福祉実践開発研究センター

講師・委員等の派遣

## 2015年度 公開講座のご案内

主に一般の方向けの講座を「市民公開講座」、主に専門職者向けの講座を「公開セミナー」として開催しています。詳細は大学ホームページに順次掲載します。インターネットから、またはFAXでお申し込みください。多くの皆様方のご参加をお待ちしております。

講師の派遣依頼は、保健福祉実践開発研究センターホームページの専用フォームをご利用ください。  
 大学ホームページ ⇒ 保健福祉実践開発研究センター ⇒ 講師・委員等の派遣  
<http://www.seirei.ac.jp/>

専門職向け公開セミナー	1 リーダーシップに関する講座		2 発達障がいに関する講座	
	テーマ	対人援助の現場で活かすリーダーシップを磨こう ～コーチ型リーダーシップを身につけよう!～	テーマ	講演:「発達障がい児者の家族支援の効果と課題」 シンポジウム:「家族会活動の過去・現在・未来」
	日時	2015年6月20日(土) 13:30～16:30	日時	2015年7月25日(土) 13:30～16:30
	講師	生利 喜佐男 氏 (コミュニケーション・ホーム喜舎代表/医療分野専門人材育成コンサルタント)	講師 シゴジスト	内山 敏 氏 (臨床心理士、小児発達学博士) 村松 良子 氏、小出 隆司 氏、津田 明雄 氏
	対象	主に保健・医療・福祉の専門職の方	対象	主に保健・医療・福祉の専門職の方
	定員	100名	定員	100名
場所	聖隷クリストファー大学	場所	聖隷クリストファー大学	

市民公開講座	1 認知症に関する講座		2 職場におけるメンタルヘルスに関する講座	
	テーマ	認知症対応セミナー(全2回) 第1回 9月17日(木)13:30～15:00「認知症の初期の症状と対応」 第2回 9月26日(土)13:30～15:30「認知症対応実践講座」 ※1回のみ参加でも結構です	テーマ	労働人口激減社会で生じているメンタルヘルス問題の現状 ～あなたはこの環境で働き続けられますか?～
	日時	第1回 9月17日(木)13:30～15:00「認知症の初期の症状と対応」 第2回 9月26日(土)13:30～15:30「認知症対応実践講座」 ※1回のみ参加でも結構です	日時	2015年10月17日(土)
	講師	本学看護学部)教授 入江 拓、准教授 入江 晶子、 非常勤講師 大石 恵美子、ほか本学教員	講師	白石 みどり 氏(株式会社スノーム代表取締役、看護師)、 本学リハビリテーション学部 教授 新宮 尚人
	対象	認知症予防に関心のある一般市民の方	対象	メンタルヘルスの予防とリワーク支援という立場で中小企業(人事担当など)を中心とした一般市民
	定員	各回48名	定員	60名
場所	聖隷クリストファー大学	場所	聖隷クリストファー大学	

インターネットからの参加申込み

FAXからの参加申込み

大学ホームページ▶保健福祉実践開発研究センター▶公開セミナー・市民公開講座  
<http://www.seirei.ac.jp>

**FAX.053-439-1406**

画面の案内に従って必要情報を入力後、送信してください。

氏名(フリガナ)・住所・電話番号・FAX番号・職業(勤務先)・申込講座名をお知らせください。

## 2015年度地域貢献事業研究費 採択一覧

本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として『地域貢献事業研究費』を配分しています。2015年度は、2015年2月に公募、4月に審査を行い、6件が採択されました。

**区分A** 地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

**区分B** 地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

区分	研究課題名	研究代表者(所属)	対象地域
A	養護教諭と連携した中学生の性教育プログラム開発	高橋 佐和子(看護)	浜松市
	妊娠中から産後までの継続的支援を目的とした「プレママひろば」の効果	神崎 江利子(看護)	浜松市
	二次予防対象事業者における老年症候群の発生に関連する因子の検討	吉本 好延(リハPT)	浜松市
	妊娠期からの親子の愛着形成と虐待予防のための家庭訪問	久保田 君枝(助産)	浜松市7区を対象とするが、主に北区、浜北区、中区とする
B	障害平等研修の実施とその効果	田島 明子(リハOT)	浜松市
	中山間地・高齢過疎集落の健康課題の再検討-CBPRを通じた実践と研究	伊藤 純子(看護)	浜松市天竜区

所属：看護＝看護学部、助産＝助産学専攻科、リハ＝リハビリテーション学部、PT＝理学療法学科、OT＝作業療法学科

【地域と歩む】保健福祉実践開発研究センター ニュースレター 第6号

発行

聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL.053-439-1400 FAX.053-439-1406  
Eメール:health-science@seirei.ac.jp

# 対人援助の現場で活かす リーダーシップを磨こう

講料  
受無

## コーチ型リーダーシップを 身につけよう!

# 6/20<sub>土</sub>

定員  
100名

13:30~16:30 (受付・開場13:00)

会場 聖隷クリストファー大学 1号館

対象 主に保健・医療・福祉の専門職の方



### 講演内容

対人援助の現場で求められるリーダーシップとは何か?

リーダーシップを発揮するためにメンバーとの信頼関係を築く

メンバーを動機づけ、行動を促す -コーチングスキルを活用する-

組織のマネージャーは「リーダー」として自分の言葉や行動によってメンバー1人1人に影響を与え、組織全体を活性化し、目指す目標を達成する役割を担っています。その最も効果的な方法の1つが「コーチ型リーダーシップ」を身につけることです。このセミナーでは「コーチ型リーダーシップ」とは何かを理解しながら、その基本的な行動について学んでゆくことを目指しています。

講師 **生利 喜佐男氏** コミュニケーション・ホーム喜舎代表・医療分野専門人材育成コンサルタント



一橋大学卒業後、大手製薬会社で経営企画部など戦略・企画部門の責任者として従事。人材育成にも関わり、コミュニケーションやリーダーシップを中心とした人材育成プログラムを開発し指導にあたる。その後、人材育成プログラムを活用した《医療機関スタッフ研修プログラム》を開発し、全国の医療機関・調剤薬局・介護施設などで指導にもあたる。退職後、「コミュニケーション・ホーム喜舎(きしゃ)」を立ち上げ、引き続き全国の医療機関などで講演や研修を行っている。

### 申込方法

- インターネットの場合・・・聖隷クリストファー大学ホームページ[<http://www.seirei.ac.jp/>] → 公開講座から
  - FAXの場合・・・聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター(053-439-1406)まで (裏面の申込み用紙をご利用ください)
- 氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込締切 **6/5** 金

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ちください。



聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558  
静岡県浜松市北区三方原町3453

看護学部 / 社会福祉学部 / リハビリテーション学部 / 助産学専攻科  
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科 / リハビリテーション科学研究科 / 社会福祉学研究科

TEL.053-439-1400 FAX.053-439-1406 <http://www.seirei.ac.jp/>

### 交通のご案内

- バスでお越しの方  
JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール  
「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」  
乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。
- お車で越しの方  
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用ください。

# 「発達障がい児者の 家族支援の効果と課題」

発達障がいは「見えない障がい」であることから理解が難しく、教育現場はもとより、思春期の心理的な課題や青年期の就労や自立といった課題で困難さに直面してしまうことが注目されてきています。今回の公開セミナーを通して、発達障がいを持つ家族会の情報や課題を専門職が理解し、今後の地域連携ネットワークについて考える機会といたします。



開催日

2015年 **7月25日** 土  
13:30~16:30(受付・開場13:00)

会場 聖隷クリストファー大学1号館7階 1701大教室

対象 保健・医療・福祉の専門職の方

定員  
100名

## 基調講演

### 「発達障がい児者の家族支援の効果と課題」



講師

浜松市発達相談支援センタールピロ 所長

うちやま さとし  
**内山 敏氏**

平成3年、浜松医科大学精神神経科入局（臨床心理）。大学院での臨床経験を経て、国立病院機構天竜病院児童精神科、浜松市発達医療総合福祉センター等で子どもの発達臨床に携わる。また、医療に加えてスクールカウンセラーとしても活動する中で、精神障害者へのアウトリーチ支援と家族支援の2つを重要視するに至る。平成20年、浜松市発達相談支援センタールピロの立ち上げに携わり平成23年より現職。小児発達学博士（大阪大学）臨床心理士。

## シンポジウム

### 「家族会活動の過去・現在・未来」

シンポジスト アクティブ代表 村松 良子氏

浜松市浜松手をつなぐ育成会 会長 小出 隆司氏

静岡県自閉症協会 会長 津田 明雄氏

受講  
無料

申込  
方法

- インターネットの場合…聖隷クリストファー大学ホームページ [http://www.seirei.ac.jp/] → 公開講座から
- FAXの場合 ……聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター [053-439-1406] まで  
(裏面の申込用紙をご利用ください)

○氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込  
締切

**7/13**月

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ち下さい。



聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL. 053-439-1400 FAX. 053-439-1406

http://www.seirei.ac.jp

看護学部/社会福祉学部/リハビリテーション学部/助産学専攻科  
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科/リハビリテーション科学研究科/社会福祉学研究科

交通のご案内

●バスでお越しの方

JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」乗車  
「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。

●お車でお越しの方

聖隷クリストファー大学第1駐車場を  
ご利用下さい。



主催：聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

2015 年度公開講座 ・ 浜松市健康ポイント “うごく&スマイル！” 参加プログラム

# 認知症対応セミナー ～はじめの一步～

参加対象：一般の方(どなたでも)

認知症の初期症状を持つ方々への対応のありかたと、社会資源の紹介、およびアロマを用いた手浴やハンドマッサージのご紹介を取り上げます。手浴やハンドマッサージも単なる技法としてではなく、お互いが安心してそのつながりを確認し、無理なくそれを維持できる身近な方法の一つとしてイメージしながら体験していただければと思います。

**参加無料**

会場： 聖隷クリストファー大学 3号館 1階 (浜松市北区三方原町 3453)

	日 時・テーマ	内 容	講 師
第 1 回	2015年9月17日(木) 13時30分～15時00分  認知症の初期症状を持つ方々への対応のありかた ～介護者の体験している世界、眺めている風景に焦点を当てて～	家族が認知症になり、自分が介護を担わなくてはならない立場に置かれたら、一体何ができるのでしょうか。何よりも介護者としての自分は、戸惑いや不安を抱えながら、現実状況とどのように折り合いをつけながら自身の人生を生きてゆくのでしょうか。共に成長しつつ生きるために、具体的な方法を交えつつ、本人と家族を取り巻く環境と、それらを捉える視座から考えます。	聖隷クリストファー大学 看護学部看護学科 教授 入江 拓
第 2 回	2015年9月26日(土) 13時30分～15時30分  「社会資源の紹介」と 「アロマを用いた手浴・ ハンドマッサージの紹介」	身近な方の“ちょっと気になる行動”で悩んだりイライラしたりすることがありませんか？お互いのイライラは相乗効果となって悪循環を招きます。そのような時に活用できるアロマを用いた手浴やハンドマッサージの仕方をご紹介します。  認知症に関係する症状は多岐にわたっています。ご家族の介護の基本は、「ひとりで抱えこまない」ことです。介護サービス利用方法の基本や同じ問題を抱えた方々との交流について、ご紹介いたします。	Aromatherapy 凜灯 アロマセラピスト 大石 恵美子 氏  聖隷クリストファー大学 看護学部看護学科 准教授 入江 晶子

申込み・お問い合わせ先・・・

**聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター**

TEL:053-439-1400 FAX:053-439-1406

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町 3453 <http://www.seirei.ac.jp>

[申込方法]インターネットまたはFAXでお申し込みください。

○[大学ホームページトップ]⇒[保健福祉実践開発研究センター]⇒[公開講座]

**[申込締切]**  
9/7(月)  
**[定員]**  
各回先着 48名  
いずれかの回のみ  
のご参加でも  
結構です。

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター主催  
聖隷クリストファー・リハビリテーション学会共催

後援：浜松商工会議所・浜松市

一般市民対象 **公開講座**

# 「労働人口激減社会で生じている メンタルヘルス問題の現状」

～職場でできることから～

**受講無料**



## 概要

中小規模の事業所でEAP(従業員支援プログラム)を実施する中で聞かれる生の声は、今の社会の困難を表しています。それは、決して個人の中の問題だけではありません。心の健康が維持できる労働環境や社会的な支援を一緒に考えていきましょう。

開催日 2015年 **10月17日** 土  
13:30~16:40 [受付・開場13:00]

会場 聖隷クリストファー大学

対象 メンタルヘルスの予防とリワーク支援という立場で中小企業(人事担当など)を中心とした一般成人

定員 60名

## 講師

しらいし  
**白石 みどり** 氏 株式会社スノーム 代表取締役(看護師)



## プロフィール

17年間、医療現場で看護師を天職としていた。特に死と向き合う現場で約700名の最期をお見送りした経験から、働く現場には心理支援が必要だと実感。心の仕組みを知るため心理学科へ在籍し、さらに社会に浸透する仕組みを創るため経営学の単位も取得。その結果、各ビジネスプランコンテストで受賞後、いくつかの起業家育成支援を経て平成25年11月に株式会社スノームを設立。

現在は大手企業から小規模介護施設まで愛知県内の事業所で働く現場のメンタルヘルス支援を実施している。ストレスチェックからカウンセリングまで、業種別にカスタマイズしたプログラムで、離職者減少や休職者減少など目に見える効果があると喜ばれている。

## 講師

しんぐう なおひと  
**新宮 尚人** 教授 本学 リハビリテーション学部 作業療法学科長



## プロフィール

広島大学大学院保健科学研究科博士後期課程修了(保健学博士)。精神科病院での臨床、専門学校での教員を経て2005年4月より聖隷クリストファー大学教員。主な研究テーマは、作業活動に伴う精神・身体的作用の利用(主に統合失調症、うつ病を対象)。仕事における強い責任感と几帳面さは厚い信頼に繋がりますが、許容量を超えてしまえば、著しく疲弊し本来の力を発揮できなくなります。職業上のストレスと反応にはどのようなものがあるのか、それに上手に対処するにはどうすればよいのか。予防から回復支援に至るまで、精神医学、心理学、リハビリテーションの知見をご紹介します。

## 申込方法

- インターネットの場合…聖隷クリストファー大学ホームページ [http://www.seirei.ac.jp/] → 公開講座から
- FAXの場合 ……聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター [053-439-1406] まで  
(裏面の申込用紙をご利用ください)

○氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

## 申込締切

**10/7** 水

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ち下さい。



聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453  
TEL. 053-439-1400 FAX. 053-439-1406  
http://www.seirei.ac.jp

看護学部/社会福祉学部/リハビリテーション学部/助産学専攻科  
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科/リハビリテーション科学研究科/社会福祉学研究科

## 交通のご案内

### ●バスでお越しの方

JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。

### ●お車でお越しの方

聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用下さい。

# 聖隷クリスミア大学 保健福祉実践開発研究センター 地域貢献事業研究報告会

2015年11月7日（土） 聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催  
1号館2階 1222・1223演習室にて 10:00～15:00

2014年度に実施された  
地域貢献事業研究の  
6件のポスター報告と  
プレゼンテーション  
を行います！

ポスター展示を見ながら  
休憩スペースとしても  
どなたでもご利用  
いただけます。  
お茶・お菓子も  
ご自由にどうぞ！



## ピアノ ミニコンサート

10:40～11:00  
11:20～11:40

演奏：店村 真知子 氏（元本学教員）



## 研究課題 (時間はプレゼンテーション開始時間)

研究課題	研究代表者(所属)
10:20～ 地域在住者を支えるリハビリサポーター体制の構築	金原 一宏 (リハビリテーション学部)
10:30～ 浜松市における成年後見制度利用状況と 市民後見人養成のニーズについて	横尾 恵美子 (社会福祉学部)
11:00～ 官学連携による高齢者の介護予防事業の実践	吉本 好延 (リハビリテーション学部)
11:10～ 実習プログラムとスパービジョンの有機的な連携のあり方	福田 俊子 (社会福祉学部)
11:40～ 「浜松市で障害に対する差別をなくす条例づくり」の検討	田島 明子 (リハビリテーション学部)
11:50～ 発達障害児への余暇支援と保護者への子育て支援の取り組み	伊藤 信寿 (リハビリテーション学部)

## 地域貢献事業研究とは：

本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する研究を対象として配分する『地域貢献事業研究費』により実施された事業研究のことです。  
当センターは「保健医療福祉分野に係るすべての人たちの共同事業・研究」を推進し、共同で課題解決を図ります。



2015 年度  
地域貢献事業研究 報告書





# 屋外・屋内での転倒関連因子は異なる—地域在住高齢者での検討—

吉本好延<sup>\*1)</sup>、根地嶋誠<sup>1)</sup>、有菌信一<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学

## 1 はじめに

高齢者の骨折・転倒の予防は、健康寿命の延伸につながる。我が国における地域在住高齢者の骨折・転倒状況を調査した先行研究では、一年間の転倒発生率は約 20～30%を示し、全転倒者の 5～10%は何らかの骨折を生じると報告されている。厚生労働省の国民生活基礎調査の結果では、要支援者が要介護になった原因の第 1 位が関節疾患、第 2 位が高齢による衰弱、第 3 位が骨折・転倒であると報告されており、骨折・転倒は要介護の原因の上位に位置付けられている。急速な勢いで高齢化が進行する我が国においては、高齢者の転倒予防が喫緊の課題である。

転倒を予防するためには、転倒の原因を明らかにすることが先決である。転倒の原因は、対象者自身の心身機能に関わる内的要因と、対象者を取り巻く物的・人的環境に関わる外的要因に分類される。内的要因として下肢筋力の低下やバランス能力の低下は、転倒と関連が強いことが明らかにされており、心身機能の改善を目的とした転倒予防教室が、全国各地で開催されている。高齢者自身や介護予防に関わる専門職者の多くは、心身機能の低下が、高齢者の転倒危険因子であると認識しているが、最近の報告では異なる見解を示した論文が散見される。高齢者の転倒関連因子を屋内外別に検討した先行研究では、屋内での転倒に関連する因子は、高齢者や女性、身体機能が低いことなど健康状態の不良が関連しており、屋外での転倒に関連する因子は、若年者や男性、歩行速度が速いなど健康状態が良好であることが報告されている。高齢者の転倒関連因子は、転倒場所によって相違を認める可能性が考えられるが、転倒場所別に転倒関連因子を検討した報告は数少なく、屋内での転倒と屋外での転倒で転倒関連因子が異なるかどうかについては十分なコンセンサスが得られていない。

## 2 目的

本研究の目的は、地域在住高齢者の転倒関連因子を屋内外別に検討することであった。

## 3 対象

対象は、2014 年 9 月から 2015 年 9 月に静岡県浜松市の老人福祉センター萩原荘が実施する二次予防事業元気はつらつ教室に参加していた高齢者 106 名中、除外基準に該当した 49 名を除く 57 名であった。除外基準は、本研究に必要なデータの欠損があった者、2015 年 9 月の時点で改訂長谷川式簡易知能評価スケールの合計点数が 20 点以下の者、本研究への参加協力が得られなかった者とした。

萩原荘の実施する事業は、浜松市の地域包括支援センターから二次予防事業の業務委託を受けて行われている。二次予防事業の内容は、閉じこもりや転倒の予防などを目的に、施設内での体操やレクリエーションなどの取り組みを行っており、参加者は週 1 回の頻度で二次予防事業に参加していた。対象者には、本研究について口頭と書面にて説明し、同意を得た。

## 4 方法

研究デザインは後ろ向き症例対照研究であり、過去に調査した転倒状況のデータおよび転倒に関連すると考えられたデータを用いて解析を行った。

### 1. 転倒状況

転倒状況は、2015年9月に過去一年間の転倒の有無を想起法によって調査した。転倒の定義は、Gibsonの定義を用いて「人による外力、意識消失、脳卒中などにより突然発症した麻痺、てんかん発作によることなく、不注意によって、人が同一平面あるいはより低い平面へ倒れること」とした。質問内容は、「過去一年間に転倒した経験はありますか」として、回答は「はい・いいえ」の二件法で求めた。また、転倒を経験した高齢者には転倒場所を調査し、屋内での転倒と屋外の転倒に分類した。

### 2. 転倒に関連する因子

転倒に関連すると考えられた因子は、2014年9月に実施した健康調査によって測定された心身機能のデータを用いた。評価項目は、性別、年齢、Mini Nutritional Assessment Short Form (MNA-SF)、大腿四頭筋筋力、Timed Up and Go test (TUG)、Life Space Assessment (LSA)、を測定した。

MNA-SFは、簡易栄養状態評価 (Mini Nutritional Assessment) の短縮版であり、6項目の質問で構成され、14点満点で12点以上が栄養状態良好、8-11点が低栄養のおそれあり、8点未満が低栄養とされる。日本人においても信頼性と妥当性が検証されている。

大腿四頭筋筋力は、ハンドヘルドダイナモメーター (ANIMA社製、 $\mu$ -Tas F-1) を用い、等尺性筋力を測定した。測定方法は、対象者は両上肢を胸の前で組み、体幹垂直位、膝関節90°屈曲位として、センサーパッドを遠位部に設置して測定した。測定は左右2回ずつ行い、最大値を体重比百分率 (%) に換算したものを採用した。

TUGは、肘掛つきの椅子に腰掛けた姿勢から立ち上がり、3m先のコーンを回って着座するまでの時間をストップウォッチで計測した。対象者は、一連の動作を最大努力で行った。測定は2回とし、最短時間を採用した。

LSAは、身体活動を生活空間といった概念でとらえ、居室から町外までの生活空間を5分割し、活動範囲・活動頻度、移動の自立度を評価する指標である。合計点は、120点とし、合計点が高いほど、生活空間が広く、活動性が高いことを示す。

### 3. 統計解析

転倒の有無に関連する因子の検討は、年齢、性別、MNA-SF、大腿四頭筋筋力、TUG、LSAの各測定項目においてMann-WhitneyのU検定を用いて、屋内外の転倒場所別に群間比較を行った。また、屋内の転倒の有無と屋外の転倒の有無をそれぞれ従属変数、各測定結果を独立変数としたロジスティック回帰分析を変数増加法により検討した。有意水準は5%未満とした。データ解析には統計ソフトSPSS version22を用いた。

## 5 結果

---

### 1. 対象者の特性

対象者の平均年齢は  $84.4 \pm 4.8$  歳、Body Mass Index は  $22.4 \pm 3.4\text{kg/m}^2$  であり、男性 2 名、女性 55 名であった。

### 2. 転倒状況

屋内での転倒者は 14 名 (24.6%) であり、転倒件数は計 15 件であった。屋内での転倒場所は、リビングが 6 件、玄関が 2 件、寝室が 2 件、台所が 2 件、浴室が 2 件、トイレが 1 件であった。

屋外での転倒者は、6 名 (10.5%) であり、転倒件数は計 6 件であった。屋外での転倒場所は、道路・歩道が 2 件、公共交通機関が 2 件、庭が 2 件であった。

### 3. 屋内・屋外別の転倒関連因子

群間比較の結果、屋内の転倒関連因子は、MNS-SF が有意な因子として抽出され、屋内転倒群の MNS-SF は、非転倒群より低値を認めた ( $p=0.002$ )。屋内での転倒の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果、MNS-SF が有意な項目として抽出された (偏回帰係数:  $-0.610$ 、有意確率:  $0.003$ 、オッズ比  $0.543$ 、95%信頼区間:  $0.361 - 0.816$ )。

群間比較の結果、屋外の転倒関連因子は、TUG が有意な因子として抽出され、屋外転倒群の TUG は、非転倒群より低値を認めた ( $p=0.006$ )。屋外での転倒の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果、TUG が有意な項目として抽出された (偏回帰係数:  $-0.936$ 、有意確率:  $0.028$ 、オッズ比  $0.392$ 、95%信頼区間:  $0.170 - 0.906$ )。

## 6 考察

---

本研究では、地域在住高齢者を対象に、屋内での転倒と屋外での転倒別に転倒関連因子を検討することで、転倒場所別に転倒関連因子が異なるかどうかを検討した。結果、屋内での転倒は栄養状態が不良な高齢者に転倒が多く、屋外での転倒は TUG が低い高齢者に転倒が多かったことから、屋内外で転倒関連因子が異なることが明らかになった。本結果から、過去の転倒歴が必ずしも健康指標を反映しない可能性があること、転倒場所を考慮していない過去の転倒研究では、転倒の予測精度の低下やアプローチ効果を低く見積もる可能性があると考えられた。

# 妊娠期からの親子の愛着形成と虐待予防のための家庭訪問

久保田君枝\*<sup>1)</sup>、三輪与志子<sup>1)</sup>、北堀 昌代<sup>2)</sup>、疋田百合香<sup>3)</sup>  
<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学、<sup>2)</sup>聖隷三方原病院、<sup>3)</sup>遠州総合病院

## 1 背景

子育ての環境が変化している中、周りに頼れる人もなく孤立感や負担感を抱えやすく、子育てに自信が持てない親が多くなっている状況においては、妊娠期から親になる人たちに対し児童虐待の予防を視野に入れた支援を行っていく必要がある。

健やか親子 21 (第 2 次) の基盤課題 A (切れ目のない妊産婦・乳幼児への保健対策) が述べられている。さらに、厚生労働省が示している養育支援訪問事業においては、乳児家庭全戸訪問直後の集中的なサポートの重要性を謳っているが、乳児期の親子の愛着の形成は、さまざまな子どもの発達上の問題や親の生育歴なども絡んでくるのですべて同じ対応ができるものではない。したがって虐待のハイリスク要因をもつ家庭を早期に発見し、個々の家庭の持つニーズに即した適切な支援を届けることができる地域の仕組みづくりが急務である。

よって、子育てに悩む、親と子の愛着が形成されやすい妊娠や出産直後からの家庭訪問を行い、親子の愛着を深める家庭訪問の充実とスキルアップを図り、虐待予防を目的とする。

家庭訪問員の養成は、地域の特性 (在日外国人を含む) を踏まえて、Healthy Families America (健康な家族アメリカ、以下 HFA) プログラムを導入した家庭訪問員の養成を行う。さらに、家庭訪問員の技術向上と実践スキルを保つための管理・運営に努め、家庭訪問の質の保障をする。

## 2 目的

親と子の愛着が形成されやすい妊娠期や、出産直後からの家庭訪問を行い、親子の愛着を深め、親が自立し、地域の中で安心して子育てができるように、支援を通して虐待を予防する。

## 3 方法

### 1. 家庭訪問の実際

- 1) 対象者：妊娠中から出産直後で病院の産科外来より家庭訪問が必要と紹介されたケースをアセスメント会議に掛けて訪問対象を決定した親子。
- 2) 訪問員：家庭訪問員は家庭訪問員養成講座受講修了している有資格者、通訳支援員は家庭訪問員養成講座受講修了している通訳経験者、且つ当団体にて訪問員として登録している者
- 3) 訪問の同意：妊娠中の定期妊婦健康診査の時に産科外来で会い、訪問を行う理由やプログラムの内容を説明し、同意を得る。その後、妊娠中から訪問を開始する。
- 4) 実施場所：対象者の自宅、病院、その他
- 5) 訪問ケース：10 件 (内外国人 3 件)

## 2. 母子保健事業を担当している行政機関との連携

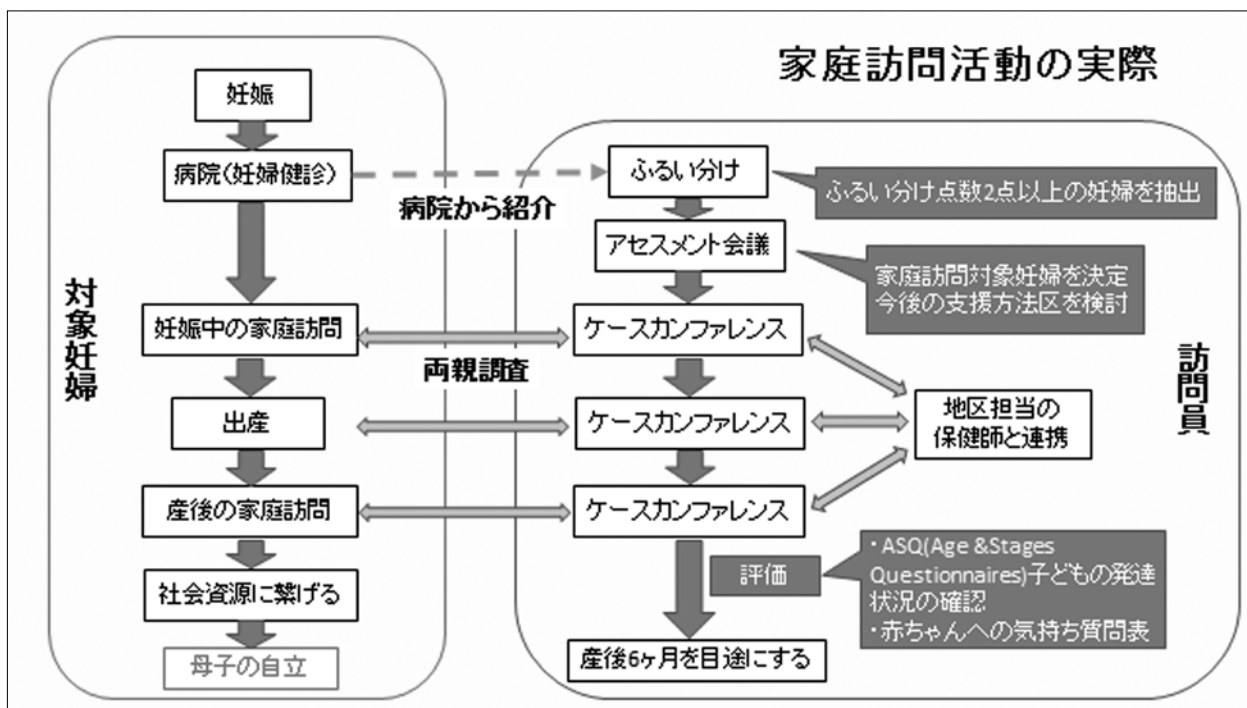
- 1) 地区担当保健師との情報の共有：家庭訪問、電話相談などの情報を地区担当保健師に伝え、担当保健師からの情報連絡もあり、情報を共有している。

## 3. 訪問内容

- 1) 妊娠中の家庭訪問：胎児に関する感情・家族の受け止め・出産入院の準備状況・赤ちゃんを迎える態勢などについて確認する。
- 2) 病棟訪問：生まれたという連絡が入ったら、病棟訪問をする。出産直後は避け、母体の回復への配慮と母子関係の状況を見るために3～4日目に訪問する。赤ちゃんへの思い、親として世話をすることの受け止め、家族の受け止めなどを確認。
- 3) 退院後の家庭訪問：1週間に1度を原則とした家庭訪問を開始する、HFAのプログラムに沿って実践する。その訪問活動はあくまでも、親子の愛着形成を主軸としている。この活動は、医療的な助言は基本的には行わず、育て方や家庭環境においても、その家庭の短所を修正する訪問ではなく、あくまでも長所を見つけ、その長所を活かしながら、修正すべきことを親に気付いてもらい、親が主導で行っていく訪問活動である。
- 4) 両親調査と訪問記録を行う。

## 4. ケースカンファレンス会議とスーパーバイズ会議の開催

- 1) 会場：聖隷クリストファー大学7階会議室、浜松市福祉交流センター他
- 2) 内容：月に1度、家庭訪問員が集まり家庭訪問で見えてきた問題、課題、サポート等を議論しながら情報共有し、次のステップに繋ぐ会議を開催する。





## 5. 倫理的配慮

A 大学倫理委員会（承認番号 25-162）の承認を得ている。また、調査協力施設には倫理審査委員会の承認を得た。

## 6. 家庭訪問養成講座

1) 本講座は、ヘルシー・スタート・アメリカ（HFA）のプログラムに学び、妊娠出産直後から、定期的な家庭訪問を行う家庭訪問員を養成します。保護者にそっと寄り添い、親と子の愛着の絆を育んでいくことができる援助方法を習得する。

2) 受講対象：看護師、助産師、保健師、保育士、教育関係者、児童民生委員、支援者、バイリンガルの方等（個人情報扱いを理解している方、訪問に同伴する通訳）

表1) 家庭訪問養成講座

日付	時間	テーマ
9/26	13時～15時	ヘルシースタートアメリカ（HFA）とは？
	15時～17時	12 重大原則に基づいた長所を活かした支援
10/9	19時～21時	地域社会の資源につなぐ
10/30	19時～21時	子どもと心を通わせるゆれあい遊び
11/14	10時～12時	ニーズの把握の方法～両親調査・記録の書き方～
	13時～15時	家族の強みと課題の評価～支援計画の立て方～
11/28	13時～15時	乳幼児期の発達と生活づくり
	15時～17時	訪問の実際～よくある質問と支援の内容～
12/5	13時～15時	実践を支える5つの戦略I～聞き方の戦略～
	15時～17時	実践を支える5つの戦略II～問題解決の方法～

## 4 結果

### 1. 家庭訪問事例の訪問内容と継続か終了したか理由の一部紹介

No	年代	訪問内容	継続・終了(理由)
1	10 未婚	若年初産。夫になる人 20 歳代、無職、既往症(母) 過呼吸発作、適応障害。中学 2 年より不登校。望んだ妊娠ではなかった。両親もお腹の赤ちゃんに関しては堕胎を希望していたが時期を逸したため出産の方向で意思決定する。本人と夫となる人が、今後、お腹の赤ちゃんを自分達で育てられる様に支援する、両家族の協力と援助を求めていく。	終了(家族(両親)の愛情が本人に伝わり両親の支援が得られるようになり、本人も親としての自覚が芽生えて、成果がみられた。)
2	10 未婚	若年妊婦でシングルマザー。実父母の協力が得にくい。	終了(妊婦期(妊婦 8 ヶ月)からの訪問を行い、本人の出産と子育てを自分で頑張るという気持ちで支えた。出産後、児に対する気持ちが強くあり、実母と実父の協力が得られ、しっかり子育てをしている。実父母との関係性も児(孫)を通じて良い関係に修復された。)
3	40 未婚	ペルー国籍、日本語が話せない、シングルマザー、健康保険未加入、経済的不安子育て不安	終了(出産前・出産後に必要な準備の支援を実施。生活保護の手続きに関する説明した。保険なく受けられる支援の紹介。少しでも働いてお金を稼がなければいけないという姿勢が少しずつみられる様になった。)
4	20 既婚	早産、妊婦 32 週で出産、新生児が NICU に入院、実母の協力が得られない。	終了(入院中に面会し、家庭訪問の希望があった、児が入院中は毎日夜間に児に面会に行っていた。退院後、1 カ月で面会した時、夫が妻に対して指示的な態度が気になった。次の家庭訪問の約束の日に電話メールしても返事がなく訪問を拒否された。)

### 2. 事例の背景からの問題点

1) 若年妊婦、予期せぬ妊娠、望まない妊娠、不登校 高校中退、経済的に困窮、妊婦健康診査未受診期間が長い、パートナーに父親意識が芽生えていない・無責任、実の両親との親子関係が断絶しているなど、事例の背景にある問題が明らかになった。

### 3. 家庭訪問養成講座後のアンケート結果

- 1) 受講者延べ人数：102 名
- 2) アンケート回収枚数：98 枚(改修率 96%)
  - ①講座についての満足度は「とても満足」「満足」を合わせて 100%
  - ②満足度として「役立つ情報が得られた」「日頃の生活や活動に役立った」を合わせると 53%

## 5 考察

---

家庭訪問を通して、訪問員が親のモデルとなって、対象の長所を認め、褒めることで親意識が芽生え、児への世話をする行為の中に親としての自覚や喜びを感じている。その過程は、マザーの親役割獲得のプロセスと同様である。それは、親役割を模倣の段階から自分の子に合った育児、子どもが満足する方法を育児経験を通して学習している。その過程が親子の絆を深め、親としての育児の楽しみや悩みが自信につながっている。

更に、親の子育てへの自信は、他の親子に関心を持ち、関わりを求めることによって、地域の中でのつながりを持ちながら子育てすることを求めている、親は、関わりの中での楽しさや新しい発見として、子どもの成長や子育ての親の考え方の違いを知り、子育ては自分の親子の関係の中でのやり方でよい、自分は自分でよい、「この子の母親は自分である」ということを認識している、ステレオタイプの母親役割モデルにとらわれない親像が見えたことは、訪問者として家庭訪問活動の意義を感じている。

家庭訪問員の養成講座は継続的に行い、家庭訪問員の増員を図り、地域で家庭訪問を必要としている親子に他職種の方々と連携・協働して、子ども虐待を未然に予防する活動を行っていききたいと考えている。

## 6 学会発表

---

- 1) 第30回助産学会 2016年3月
- 2) 第11回ICMアジア太平洋地域会議・助産学術集会 2015年7月
- 3) 第55回日本母性衛生学会 2014年9月

# 養護教諭と連携した中学生の性教育プログラム開発

高橋佐和子<sup>\*1)</sup>、伊藤純子<sup>1)</sup>、渥美早百合<sup>2)</sup>、石川志奈<sup>3)</sup>、千徳茜<sup>4)</sup>  
<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学、<sup>2)</sup>細江中学校、<sup>3)</sup>三方原中学校、<sup>4)</sup>八幡中学校

## 1 背景・目的

学校における性教育の必要性は認識されているものの、テーマの扱いにくさや思春期の生徒との関わりの難しさから、一般教員には敬遠されがちである。養護教諭は、心身の成長・発達に関する専門的知識を持つ上に、学校で発生するいじめや性に関する問題行動等の情報が集まりやすい立場にあるため、生徒の性に関する課題を把握しやすい。そのため、学校で性教育の企画および推進の中心的役目を担っているのは、養護教諭であることが多い。しかし、養護教諭は、学校に1人しか配置されていないことがほとんどであるため、性教育プログラムの開発や評価に専念できる時間は限られており、話し合う相手もなく、把握した課題や実態をプログラムの内容や方法に生かしきれていないのが現状である。

そこで、これまで研究者らは、地域の複数の中学校の養護教諭と連携・協力しながら性教育プログラムを開発し、その実施に取り組んできた。

ここでは、養護教諭の把握した情報を生かして開発したプログラムの効果を評価することを目的に行った中学生へのアンケート調査の結果を報告する。

## 2 方法

### 1. プログラムの検討

A中学校で実施予定の60分間の「性に関する講演会」のプログラムを開発した。

研究組織のうち、現職の養護教諭3名は中学生の実態把握を行い、大学教員2名は教育プログラムの作成と実施を担当することとした。

プログラム開発のために4回(2ヶ月に1回程度)、研究メンバーによる会議を行った。会議では、研究者が試作したプログラム案を提示し、これをもとに中学生の性に関する課題や関連があると考えられる生活実態、それぞれの学校での性教育や関連する指導の実施状況、実情を踏まえた効果的な教育方法について、話し合いを行った。話し合われた内容からプログラム案の修正を繰り返した。また、現職の養護教諭の話から、中学生のコミュニケーション能力の低さや、性的な関心の個人差の大きさに関する具体的な情報を収集することができた。これらの情報をもとに、プログラムには、コミュニケーション力や自己効力感を高めるアサーションや代理的体験を取り入れた。また、性に関する講演の際、中学生は周りの目が気になることや、恥ずかしさから、下を向く姿がよく見られるという実態も挙げられていた。そこで、中学生の好む視覚的な効果を重視したパワーポイントを教材に使用し、テレビの相談コーナーという場面設定で演劇調に講演を進めるなど、恥ずかしさを軽減し、興味を引き付けるための工夫をした。

### 2. 講演会の実施

開発したプログラムは2015年11月にA中学校の2年生204名を対象に、体育館で実施した。講師は、研究メンバーのうち大学教員2名が担当した。一人がテレビ番組の司会者、もう一人が相談に答える思春期の性に関する専門家という設定で講演を行った。

### 3. プログラムの評価

A中学校では、講演前後に中学生の性に関する意識についてのアンケート調査を行った。

事前調査は講演の1週間前から前日までの間にクラスごとに実施し、事後調査は講演後、講演会場から教室に戻った直後にクラスごとに実施した。

アンケートの内容は、本プログラムで目的とした早期妊娠予防に関連する意識の変化を評価するために、計画的行動理論 1) 及び P/W モデル 2) をもとに自作した 12 項目を用いた。回答は、「とてもそう思う:1」から「全く思わない:6」の 6 段階で得た。

調査結果の分析には、SPSS22.0 を使用し、Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。

さらに、講演終了後の中学生の感想を得るため、事後のみ、講演が「役に立つと思うか」、「おもしろかったか」を各 4 段階で尋ね、感想の自由記述も項目に加えた。

表 1 事前事後アンケートの質問項目

1	性の悩みを、正しいアドバイスをくれる人(親・医師・先生など)に相談できる。
2	人より体の発育が早い、または遅いのは恥ずかしいことだ。
3	彼氏彼女がいる(異性と交際する)中学生はカッコいい。
4	10代のうちに自分の子どもができてもいい。
5	あなたは男女の肉体的、性的な関わりを経験したくないと思っていると仮定して、交際相手にそれを求められたら断ることができる。
6	友達より早く男女の肉体的、性的な関わりを経験してみたい。
7	中学生は男女の肉体的、性的な関わりを経験するべきではない。
8	中学生であっても、男女の肉体的、性的な関わりをするかどうかは個人の自由である。
9	あなたの親は「中学生は男女の肉体的、性的な関わりをしていい」と思っている。
10	あなたの友達は「中学生は男女の肉体的、性的な関わりをしていい」と思っている。
11	自分は2年以内に男女の肉体的、性的な関わりをするかもしれない。
12	ヤンママ・パパ(10代で自分の子どもを持つ人)はカッコいいと思う。

#### 4. 倫理的配慮

実施前、保護者には文書で、中学生には口頭で研究の目的と回答の自由について説明を行った。アンケート用紙は無記名とし、封筒に入れ、封をした状態で回収した。なお、本調査は聖隷クリストファー大学の倫理委員会の承認を得た方法を遵守して実施した。

### 3 結果

A 中学校の 2 年生 204 名中、198 名から回答を得た(男子 98 名、女子 94 名、未記入 4 名: 回答率 97.1%)。

#### 1. 公演前の意識(表 2)

早期妊娠予防に関連する意識に関する 12 項目事前調査結果は以下の通りであった。

表 2 講演前の意識

項目 (表 1 参照)	1: とても そう思う	2: そう 思う	3: まあ 思う	4: あまり 思わない	5: そう 思わない	6: 全く 思わない	無回答
1 相談できる	8 (4.0)	9 (4.5)	38 (19.2)	45 (22.7)	43 (21.7)	52 (26.3)	3 (1.5)
2 発育恥ずかしい	1 (0.5)	9 (4.5)	40 (20.2)	65 (32.8)	36 (18.2)	44 (22.2)	3 (1.5)
3 交際カッコいい	11 (5.6)	10 (5.1)	43 (21.7)	55 (27.8)	32 (16.2)	44 (22.2)	3 (1.5)
4 10代で子ども肯定	1 (0.5)	2 (1.0)	2 (1.0)	37 (18.7)	38 (19.2)	115(58.1)	3 (1.5)
5 断ることができる	69 (34.8)	42 (21.2)	41 (20.7)	21 (10.6)	10 (5.1)	12 (6.1)	3 (1.5)
6 早く経験したい	3 (1.5)	2 (1.0)	10 (5.1)	40 (20.2)	38 (19.2)	101(51.0)	4 (2.0)
7 中学生はすべきでない	67 (33.8)	46 (23.2)	33 (16.7)	23 (11.6)	10 (5.1)	14 (7.1)	5 (2.5)
8 個人の自由	21 (10.6)	27 (13.6)	66 (33.3)	31 (15.7)	18 (9.1)	31 (15.7)	4 (2.0)



9 親は肯定	3 (1.5)	1 (0.5)	7 (3.5)	29 (14.6)	46 (23.2)	108(54.5)	4 (2.0)
10 友達は肯定	9 (4.5)	7 (3.5)	26 (13.1)	38 (19.2)	44 (22.2)	70 (35.4)	4 (2.0)
11 2年以内にするかもしれない	2 (1.0)	1 (0.5)	7 (3.5)	19 (9.6)	29 (14.6)	136(68.7)	4 (2.0)
12 ヤンママ・パパ かっこいい	3 (1.5)	4 (2.0)	10 (5.1)	29 (14.6)	43 (21.7)	106(53.5)	3 (1.5)

## 2. 講演前後の意識の変化 (表 3)

早期妊娠予防に関連する意識に関する 12 項目について、講演前後の回答の変化について分析を行った。

12 項目のうち、「中学生は男女の肉体的、性的な関わりを経験するべきではない」以外の 11 項目で有意な差があった。

## 3. 実施後の感想

講演後、講演が「役に立つと思うか」、「おもしろかったか」について、それぞれ 4 段階で回答を求めた。

「役に立つと思うか」の質問では、「役に立つと思う」が 125 名(63.1%)、「まあ役に立つと思う」が 45 名(22.7%)、「あまり役に立たないと思う」が 4 名 (2.0%)、「役に立たないと思う」が 3 名 (1.5%) であった (無回答 :21 名 10.1%)。

「おもしろかったか」の質問では、「おもしろかった」が 103 名(52.0%)、「まあおもしろかった」63 名(31.8%)、「あまりおもしろくなかった」5 名 (2.5%)、「おもしろくなかった」5 名 (2.5%) であった (無回答 :22 名 11.1%)。

自由記述に記載したものは 65 名 (32.8%) であり、このうち 64 名が「おもしろかった」、「わかりやすかった」などの肯定的意見であった。

表 3 講演前後の意識の変化

項目 (表 1 参照)		中央値	平均値	SD	p
1 相談できる	前	4.00	4.34	1.39	0.00**
	後	3.00	3.17	1.41	
2 発育恥ずかしい	前	4.00	4.32	1.19	0.00**
	後	5.00	5.11	1.05	
3 交際かっこいい	前	4.00	4.12	1.41	0.00**
	後	5.00	4.60	1.32	
4 10代で子ども肯定	前	6.00	5.33	0.94	0.00**
	後	6.00	5.77	0.59	
5 断ることができる	前	2.00	2.47	1.49	0.00**
	後	2.00	2.24	1.57	
6 早く経験したい	前	6.00	5.12	1.13	0.00**
	後	6.00	5.52	0.88	
7 中学生はすべきでない	前	2.00	2.51	1.54	0.55
	後	2.00	2.44	1.84	
8 個人の自由	前	3.00	3.47	1.53	0.00**
	後	5.00	4.40	1.58	
9 親は肯定	前	6.00	5.26	1.04	0.00**
	後	6.00	5.53	0.83	
10 友達は肯定	前	5.00	4.60	1.42	0.00**
	後	5.00	5.01	1.21	
11 2年以内にするかもしれない	前	6.00	5.47	0.97	0.00**
	後	6.00	5.69	0.68	
12 ヤンママ・パパかっこいい	前	6.00	5.17	1.14	0.00**
	後	6.00	5.57	0.85	

※ Wilcoxon

\*\*p<0.01 \*p<0.05

## 4 考察

本講演では、養護教諭が把握している実態をもとに話し合い、その結果を反映させて開発したプログラムを実施した。実施前の調査結果から、中学生は、性の悩みを相談しにくい、性交渉を断ることができる自信の低さがあることが示唆された。養護教諭の把握した課題に近い結果であった。いずれも、若年妊娠に直結する課題であり、これらを考慮したプログラム開発が必要であろう。評価の指標とした若年妊娠予防への意識に関する項目の多くで有意な変化がみられ、プログラムの内容に一定の効果があつたと考える。しかし、変化のなかつた項目もあり、内容とともに評価項目についての検討が今後必要であろう。「中学生は性交渉をすべきでない」に有意な変化が見られなかつた原因には、講演では性交渉は雰囲気流され、意思に反して行ふべきものではないことや若年妊娠が抱える問題点については話したものの、中学生の性交渉を否定したわけではなかつたこと、1回の指導では変化しにくい意識であつた可能性が考えられる。また、実施後、おもしろかつた、役に立つと思うという感想が多かつたことから、講演に興味を持てたことがうかがわれる。講演の形式における工夫もこの結果に良い影響を及ぼしたものと思われる。今回は講演直後の調査結果を事前調査と比較したが、今後は講演の効果の持続についても、検証できるような研究設計が必要であろう。

幾つか限界はあるものの、養護教諭の把握している情報を生かした教育の内容及び方法を生かし、教育プログラムを開発することには大きな意味があると考えられる。今後は、プログラム開発に必要な情報を明らかにし、学校に一人しかいない養護教諭論であつても的確な実態把握・情報提供ができ、教育に活用できるシステム作りが必要であろう。

## 5 まとめ

養護教諭と連携しながら地域における講演活動を実施し、地域の子どもたちのみでなく、養護教諭の力量向上にも寄与できるよう、研究を継続していきたいと考える。

本研究の過程の一部は、The 6th International Conference on Community Health Nursing (韓国・ソウル：2015.8) で発表した。結果の総括については、第75回公衆衛生学会(大阪:2016.10)において発表する予定である。最後に、本研究にご協力くださいました中学生の皆様へ感謝申し上げます。

### 【参考文献】

- 1) 松本千明. 医療・保健スタッフのための健康行動理論の基礎. 東京：医歯薬出版株式会社, 2003. 37 - 46
- 2) Gibbons FX, Gerrard M, Blanton H et al. Reasoned action and social reaction: willingness and intention as independent predictors of health risk, *Journal Of Personality And Social Psychology*1998; 74 (5) :1164-80

# 妊娠中から産後までの継続的支援を目的とした“プレママひろば”の効果

神崎江利子\*<sup>1)</sup>、黒野智子<sup>1)</sup>、村松美恵<sup>1)</sup>、室加千佳<sup>1)</sup>  
齋藤由美<sup>2)</sup>、宇田公美子<sup>2)</sup>、望月優子<sup>2)</sup>、高洲昌子<sup>2)</sup>  
<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学看護学部、<sup>2)</sup>浜松市助産師会

## 1 研究の背景と目的

子育ての環境も大きく変化し、妊産婦の育児不安を軽減するためには妊娠中から産後の支援は大切であると考えられる。子育て支援については様々な施策が打ち出されており、A市助産師会でも2013年より、厚生労働省の産前・産後の継続した母親への支援事業の一環として、妊娠中から育児期へと継続して仲間づくりができる機会を提供することを目的とした“プレママひろば”を年1回、会主催の事業として開催している。A市助産師会主催の“プレママひろば”は、妊産婦に医療施設・地域という垣根越えて支援することができ、妊産婦にもたらされた効果やニーズを知ることで、子育てしやすい地域社会を考えるきっかけへとつながる。今回の研究は、A市助産師会が主催する“プレママひろば”に参加した母親が、妊娠期から産後まで継続的な支援を受けることによってもたらされる効果と地域で必要とされる支援内容を明らかにすることを目的とした。

ここでいう“プレママひろば”の効果とは、妊娠期から産後までを継続して支援する“プレママひろば”に参加することによって母親自身に生じた結果をいう。

## 2 研究方法

### 1. 調査期間

2015年10月～12月に行った。

### 2. 研究参加者

A市助産師会が主催する“プレママひろば”に第1回から3回まで継続して参加し、約1年後の“プレママひろば”に先輩ママとして参加した母親6名である。

### 3. 調査方法

研究参加への依頼方法は、A市助産師会から、先輩ママとして参加している母親に研究目的や方法、倫理的配慮に関する内容を記載した依頼文を配布してもらい、研究協力書の返信があった者に対して、研究者から直接連絡し、再度研究目的や方法、倫理的配慮について説明を行った。同意が得られた母親6名にインタビューガイドに従い構成的面接を行い、了承を得て録音し逐語録を作成した。データは共同研究者が複数で読み込み、“プレママひろば”に参加することによってもたらされた効果と地域で必要とする子育て支援に焦点を当て、類似した内容に分類した。

### 4. “プレママひろば”の概要

#### ① “プレママひろば”のねらい

“プレママひろば”の目的は、妊産婦に向けて情報発信・提供することで、妊産婦が妊娠・出産・育児についての正しい理解図形を深め、心身の健康管理と母性意識を育むことができることと産後に孤立なく育児ができることである。

#### ② “プレママひろば”のプログラム(表1)

会場はA市B区保健福祉センター。産前・産後に継続したケアが受けられるようにA市内で開業する助産師が中心となって、初回開催日に妊娠24週から31週となる初産婦を対象に妊娠期2回、産後1回の3回を1コースとした集団指導を行っており、実施時間はいずれも150分である。



先輩ママからのエール (第2回)



親子同窓会 情報交換 (第3回)

表1. “プレママひろば” のプログラム

ねらい・開催時期	内容	参加人数 (2015 年度)
第1回 マタニティ編 出産に向けての心身の準備と仲間づくり (妊娠 24 週～ 31 週頃) 9 月上旬開催	・お産のはなし ・おっぱいのはなし ・おしゃべりタイム	妊婦 17 名
第2回 マタニティ編 産後と育児の生活がイメージできる (妊娠 28 週～ 35 週頃) 9 月下旬開催	・赤ちゃんのお世話 ・先輩ママからのエール ・おしゃべりタイム	妊婦 12 名 母子 (先輩ママ) 7 組
第3回 親子同窓会 (出産後編) 育児についての情報交換 (産後 3～4 ヶ月頃) 2 月下旬開催	・はじめまして赤ちゃん ・ベビーマッサージ ・子育てワンポイント	母子 13 組

## 5. 倫理的配慮

本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得て実施した (認証番号 15028)。研究への参加や途中辞退は自由意志であること、個人情報保護されること、研究の公表予定等を書面と口頭で説明し同意書に協力者の署名を得た。得られたデータは全て匿名化し個人が特定できないように処理した。データ保管は施錠できるところに厳重に管理した。

## 3 結果

### 1. “プレママひろば” の状況

母子健康手帳交付時に行政の協力を得て“プレママひろば”の案内を配布してもらい、19名から申し込みがあった。参加人数は各回で異なるが、3回共に同じメンバーが参加している (表1)。4名の助産師が会の企画・運営に携わり、ファシリテーター的役割を担い、参加者の状況に応じて、A市保健師とも連携を取りながら行っている。

### 2. 研究協力者の背景

研究協力者は6名、母親の平均年齢は  $31.67 \pm 2.50$  歳であった。背景を表2に示す。

表2 研究協力者の背景

	年齢	出産歴	職業	出産施設	分娩様式	家族形態	子どもの月齢
a	30歳	初産婦	理学療法士	ア総合病院	経膈分娩	核家族	10ヵ月
b	36歳	初産婦	専業主婦	イ総合病院	帝王切開術	核家族	11ヵ月
c	31歳	初産婦	保健師	ウ総合病院	経膈分娩	核家族	12ヵ月
d	33歳	初産婦	看護師	ア総合病院	経膈分娩	核家族	12ヵ月
e	29歳	初産婦	看護師	ア総合病院	経膈分娩	核家族	12ヵ月
f	31歳	初産婦	会社員	エ総合病院	経膈分娩	核家族	12ヵ月

### 3. “プレママひろば”における継続支援の効果

A市助産師会が主催する“プレママひろば”に3回継続して参加し、産後1年を経た後に先輩ママとして参加した母親6名に面接を行った。調査内容は、“プレママひろば”への参加動機、妊娠期から産後まで継続支援を受けたことによってもたらされた効果、地域で必要と考える子育て支援等である。【】はカテゴリ、「」は実際の表現を表す。

“プレママひろば”への参加は、6名全員が母子健康手帳交付時に区役所で紹介された“プレママひろば”の案内に記載された内容に興味を持ち、自ら応募して参加していた。

参加動機は、【ママ友達をつくるきっかけになる】【地域の学級活動にも参加してみたい】【産後も集まれるものが他にはない】という理由であった。

“プレママひろば”による継続支援の効果は、【顔見知りから仲間になれる】【話し合うことで不安が解消し安心できる】【お互いの達成感・満足感を認め合う】の3カテゴリに分類された。【顔見知りから仲間になれる】は「プレママに来ていた子と再会して、そこから話が盛り上がり、お互いにママ友欲しかったよね、と言って徐々に広がって(仲良くなって)いった感じです。」「参加していた子の周りの子でけっこう広がって、5～6人ぐらいは(仲間)できました。」などの内容があった。【話し合うことで不安が解消し安心できる】は(赤ちゃんの抱き方とか)全然わからなかったので試行錯誤しながらやっていたんですが、プレママで教えてくれたのでだいぶ不安が解きました。」「同じような境遇の人とお話しできたのはよかったです。妊娠中は不安を解消できた。」「助産師さんに『大丈夫だよ』みたいな(中略) そうやって言われるとすごく安心できるな、と思った。」という内容であった。【お互いの達成感・満足感を認め合う】は「無事に産まれた開放感じゃないけど、そうですね。あとは、出産をやり遂げたという自信じゃないけど、それをお互いに話すのが多分……、楽しい。」「今の状況とか、かわいいねとかお互いの子を褒め合ったりとか、そういうのがあって楽しかった」などの内容が含まれていた。

### 4. 地域で必要と考える子育て支援

地域で必要と考える子育て支援は【親子で気軽に遊びに行ける場が欲しい】であった。「午前中はわりとひろばってやっているんですけど、午後の時間に出られるところがない(中略) 午後にふらっと遊びにいける場所がもっとあればいいのになとすごく思います。」「(動き回るような)遊びが目的で来ている(1歳以上の)子がほとんどで、で、同じようなママも、同じぐらいの月齢の子がいなくて行きづらいよねって言って行っていない。」などの内容があった。



## 4 考察

### 1. “プレママひろば”による継続支援の効果

妊娠期から継続して“プレママひろば”に参加することで母親達は【顔見知りから仲間になれる】と感じ、“プレママひろば”は【話し合うことで不安が解消し安心できる】【お互いの達成感・満足感を認め合う】場となっていた。

その場限りの触れ合いだけではあまり仲良くもなれず親しみも感じ難いが、3回続けて同じメンバーが集まることで共通の話題もでき、仲間同士という親近感がわき【顔見知りから仲間になれる】と感じていた。出産や産後と育児の生活について自分が確認したいことを毎回その場で質問し、先輩ママや助産師から丁寧に説明を受けたり、専門職である助産師から「大丈夫」という言葉をかけてもらったり、母親が抱えている不安や悩みを一緒に【話し合うことで不安が解消し安心できる】場となっていた。実際に人形や模型を使用して抱っこやオムツ交換の育児技術などを具体的に教えてもらい、自分が知りたいと思っている情報をその場で発信・提供してもらえることで、出産や産後の生活のイメージ化ができ、主体的に出産や育児に取り組んでいくことにつながると考える。

産後に開催される親子同窓会では、母親達は出産をやり遂げたという自信と無事に子どもが生まれたことをお互いに称え合うことで【お互いの達成感・満足感を認め合う】ことができていた。妊娠中から産後まで継続して“プレママひろば”に参加し、自分と同じ境遇にある母親達とのコミュニケーションを通して、不安や悩みを分かち合ったり、出産体験や子どもの成長に対する喜びや楽しさを言葉として伝え、思いを共有・共感し合うことで、自尊感情や自己効力感を高めあうことができ、分娩への達成感や育児に対する満足感につながっていたと思われる。

### 2. 地域で必要と考える子育て支援

母親は、子どもの予定や自分の空き時間に合わせ、同じ月齢の子どもを持つ母親が【親子で気軽に遊びに行ける場が欲しい】と考えていた。A市は育児期の親子（概ね3歳未満の子ども）を対象とした子育て支援ひろば事業を市内24ヶ所（2015）、保育園でも親子ひろばを開催している。両方共に親子が気軽に立ち寄って遊んだり、相談できる場として設置されているが、母親達は開催時間が子どもや自分の予定と合わないことや自分の子どもと同じ月齢の子どもの参加が少ないことから、参加し辛さを感じていた。第3回“プレママひろば”の親子同窓会は、産後に同じ月齢の子どもや母親と触れ合いたいという母親のニーズに即していたが、産後1回限りの集まりのため、その後も親子が気軽に交流できる場の提供を考えていくことが必要だと思われる。

## 5 結論

今回、妊娠期から産後までの継続支援を受けることによってもたらされる効果と地域で必要とする子育て支援を知るために、本調査を行った結果、“プレママひろば”各回で目標としている①出産に向けての心身の準備と仲間づくり、②産後と育児の生活のイメージ化、③育児についての情報交換は達成できていた。母親達は“プレママひろば”に参加し同じ境遇の母親達と触れ合うことで共通理解を深め、自分の妊娠・出産・育児への不安や悩み、期待、喜びを分かち合い、日頃のお互いの頑張りを認め合うことで今後の育児への励みとしていた。また、親子で気軽に参加できる場を提供することが今後の課題である。

今後も母親が安心して産み育てられるよう、A市助産師会と協力して産前産後の継続支援に取り組んでいきたい。

保健福祉実践開発センターが企画する報告会で発表するとともに、せいらい看護学会または日本助産学会での発表を予定している。

# 中山間地・高齢過疎集落の健康課題の再検討

伊藤純子<sup>\*,1)</sup>、清水正子<sup>2)</sup>、新井美夕紀<sup>2)</sup>、鈴木知代<sup>1)</sup>、仲村秀子<sup>1)</sup>、若杉早苗<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学、<sup>2)</sup>浜松市天竜区役所健康づくり課

## 1 研究の背景

我が国では急激に高齢化が進行している。平成 27 年（2015 年）にはベビーブームの世代が前期高齢者（65～74 歳）に達し、これらの世代が後期高齢者（75 歳以上）を迎える 10 年後の平成 37 年（2035 年）には、高齢者人口は 3,500 万人に達すると見込まれている。高齢者が人口に占める割合は 30% を超え、これに伴う要介護者の増加と介護・医療需要の急増に伴うサービスの不足、医療費の膨張による財政の圧迫が懸念されている。この問題を先取りする形で、とりわけ著しいスピードで高齢化問題が進行しているのが中山間地域である。浜松市北部に位置する天竜区では、高齢化率が 50% を超える地域も存在する。

地域で健康づくり活動を行う行政保健師の活動の中核は予防であり、「地域のあるべき姿」を健康課題として、住民とともに明確化して共有し、その実現を支援するものである。

しかし、住民の 2 人に 1 人が高齢者である地域、さらに並行して急速な過疎化が進行している地域では、住民は将来に向けてポジティブなビジョンを持ちにくい可能性がある。このような特徴を持つ地域での健康づくり活動は、方向性や方法論に先立った知見がなく、手探りで行われている状況である。住民の健康づくりに対する意識やニーズを把握し、共に考える過程を通して、地域の実情に適った、新しい健康づくり活動を創造する必要があると考える。

また、地域の健康課題の発見・方向性の決定は、住民主体で、かつ住民自身の手によって行われることが望ましい（ヘルスプロモーション）。そのため、今回の研究は、調査活動そのものが、住民自身の手による健康づくり活動の契機となることを配慮して計画した。

## 2 研究目的

高齢過疎地域において、①当事者である高齢者、②高齢者の介護の担い手となる世代（20～65 歳）の健康づくりに対する意識、並びに自己効力感を考察する。

## 3 研究方法

### 1. 調査の方法

CBPR の活動プロセス（CBPR 研究会、2010）に基づき実施した。CBPR（Community-Based Participatory Research for Health）は、コミュニティを基盤とした参加型研究である。地域診断を中心に展開し、調査活動そのものを住民同士のつながりを強める地域づくり活動とする方法論である。プロセスは 5 つの段階に分けられる（表 1）。

今回の研究は、第 1 段階に位置づけ「健康問題を感じ取る」ための調査活動を行った。第 1 に地域診断（既存資料の検討・住民への聞き取り調査）、第 2 に問題発見ワークショップを行い、情報収集と、住民相互が気づき考えを深める場を設けた。

### 2. 対象

浜松市天竜区佐久間町に居住する成人の方で、調査協力への理解と同意が得られた方。

### 3. 研究期間

2015 年 5 月から 2016 年 4 月

#### 4. 倫理的配慮

聖隷クリストファー大学倫理委員会で承認を得た方法（認証番号 15085）を遵守し実施した。

表1 CBPRに基づく研究活動計画

調査段階	内容	進捗	具体的内容
第1段階	「健康問題を感じ取る」	平成27年度 (本研究)	既存資料の分析 保健師課程履修者の演習・実習 課題発見ワークショップの開催 住民への聞き取り調査の実施
第2段階	「メンバーを集め、組織を作る」	平成28年度	課題発見ワークショップの開催 聞き取り調査の実施
第3段階	「健康課題を明確にする」	平成28年度	課題解決ワークショップの開催 質問し調査票の作成
第4段階	「計画をつくり実施する」	29年度以降 実施予定	聞き取り調査の実施 質問紙調査の実施
第5段階	「活動を評価し、普及するためのワークや意見交換会を開催する」	29年度以降 実施予定	住民対象の質問紙調査並びに 聞き取り調査による総合的な評価

## 4 結果

### 1. 地域診断の実施

#### 1) 既存資料の検討

佐久間町は天竜区の5地区の中で、過去10年間で最も急速に過疎化が進行している。健康上の課題として、糖尿病を除き生活習慣病の有病率は低いものの、要介護状態になると、施設入所や子ども世帯との同居のため佐久間を離れ、転出を余儀なくされる状況がある。これの背景には、独居・高齢者のみ世帯が多いことによる家族介護力不足、介護サービスの絶対量の不足がある。糖尿病が重症化した場合には、地域内に透析可能な医療機関がなく、遠方まで出向く必要がある。通院に伴って著しくQOLが低下するリスクがある。糖尿病予備軍の重症化予防、及び脳血管性認知症の予防が直近の課題であり、特に日常生活における「血糖コントロール」が重要であることが確認された。

表2 保健師課程履修生による地域診断演習とテーマ

グループ	テーマ	内容
グループA	# 介護予防（二次予防）対策のための内服管理	高齢者サロンの参加者26名に聞き取り調査を実施。軽度認知症の疑いのある独居高齢者の内服管理が徹底されないことで重症化につながるリスクを指摘した。
グループB	# 既存のサロン活動を積極的に利用できることによる認知症予防	佐久間町は高齢者のサロン活動が多く開催されていることで介護予防につながっている点が評価される一方、参加者・リーダーの高齢化等で近い将来に活動が衰退するリスクを指摘した。
グループC	# 嗜好品摂取頻度が高い可能性と食事摂取バランスの偏りによる糖尿病予備軍の重症化のおそれ	地区視診や保健師の助言より、嗜好品(菓子・アルコール類)の摂取が多い可能性に注目。特定健診の結果では肥満者は低いため、全エネルギーに占める糖質摂取割合が高い可能性を指摘した。
グループD	# 成人期からの認知症予防対策の必要性	認知症が佐久間町での生活を立ち行かなくする主要な原因と位置づけ、その予防には成人期からの意識啓発と対策が必要であると考察。問題発見ワークショップの参加より、成人も認知症に対する不安と関心があること把握した。

## 2) 住民への聞き取り調査

佐久間町在住の70歳から75歳までの住民6名に、聞き取り調査を行った。その結果、佐久間町の暮らしに対する愛着があるものの、衣食住の不便さや、急速な過疎化の進行から、集落自体が維持できなくなることへの不安があることがわかった。「終末を佐久間町で迎えられるか自信がない」一方で、「高齢になっても健康で自立した生活を継続できる」という見通しを持っていることも把握された。代表的な理由は表3の通りであった。

表3 10年後も佐久間町で自立して暮らしていると思う理由

- |  |
|--|
| ①地域に80歳以上で自立して生活できているお手本がいる(ロールモデルがある) |
| ②住民同士の繋がりが強く、日頃から困り事に対応し、健康づくりに取り組んでいる |
| ③衣食住の不便さは工夫で対応し、災害時にも長期間自立して生活できる自信がある |
| ④畑があることで惣菜食に依存せず、野菜を多く食べる健康的な食生活を送っている |
| ⑤畑の手入れや地域の草取りなどで、外出の機会が生まれ、閉じこもりにならない  |

住民の将来に対する見通しは必ずしも悲観的ではなく、逆に地域に対する強い愛着や誇り、自尊心の高さが伺われる結果であった。聞き取りに関するデータは質的分析を行い、2017年第5回日本公衆衛生看護学会にて報告予定である。

## 3) 看護学部保健師課程の学生による地域診断演習

研究者らによる調査に加え、本学の看護学部保健師課程の実習生とともに、佐久間地域を対象として地域診断を行った。計4グループが佐久間地区に入り、地域の担当保健師の助言を受けながら、高齢者サロン、家庭訪問など保健事業の場面で、住民の声を直接聞く演習を実施した(表2)。あくまで学生が行う演習のため、十分でない点もあるが、学生の率直な問いに対し、住民が真摯に本音を語ってくださった結果、興味深い示唆が得られている。

## 2. 課題発見ワークショップの開催

介護の担い手となる世代(20～65歳)のニーズ把握が必要と考え、成人を対象とした課題発見ワークショップを開催した。皇學館大学助教でワークショップデザイナーの池山敦氏の指導を受け、2016年1月に「フューチャーセッション」を実施した(表4)。

表4 課題発見ワークショップ(フューチャーセッション)

①オリエンテーション	趣旨説明、研究協力の同意を得る。
②導入	ブレインストーミング、未来年表の作成。
③意見交換	「未来の個人・地域のあるべき姿」を共有する。
④マグネットテーブル	収束。関心のあるテーマでグループを作り、考えを深める。
⑤まとめ	出された意見を統合し発表する。



### 1) フューチャーセッションとは

「意思決定や合意形成のための場ではなく、つねに問いを開き続けることで、参加者自身が目的を創り出し、主体的に実行することを促す創形成の場（株式会社フューチャーセッションズ）」であり、ヘルスプロモーションと馴染みの良い手法である。今回は、思考の枠を緩めるブレインストーミング、「未来年表（博報堂生活総合研究所）」を活用した将来像のイメージ、個人年表作成、関心のあるテーマ毎に参加者をグループ化し成果を収束する「マグネットテーブル」で構成した。

### 2) 参加者

対象は、地区担当保健師を通じ、地元消防団に協力を依頼した。参加者は20～45歳の計22名で、年代は20代2名、30代15名、40代5名で、全て男性であった。スタッフとして、天竜区健康づくり課保健師2名、研究者2名、保健師課程学生2名が従事した。

### 3) 結果

ワークを通し、将来について今後考えを深めたいテーマとして、「婚活」、「家族形態」、「認知症」、「収入・経済」の4つのグループに収束した。実施後のアンケートでは、10年後も現在の住まいで暮らしていると思うかをたずねた。「10年後も暮らしていると思う」では、「はい」16人、「いいえ」6人であった。「最後まで暮らしていると思う」では、「はい」が9人、「いいえ」10人、「わからない」3人であった。

感想として、「将来について具体的に考えることができた」「楽しい将来を作るにはどうしたらいいか考えさせられた」「将来については漠然としていて、あまり考えたことがなかった」「認知症はとても大きな問題だと思うので今から対策しなくてははいけない」などが挙げられた。

## 5 考察及び今後の方向性

本研究の主な目的は、高齢過疎地における健康課題と健康づくり活動の方向性を見出すことである。同時にその実現のために、住民自身が問題意識を持ち、主体的に健康づくりに取り組んでいこうとする風土を醸成していくことが必要である。このプロセスには時間を要すると見込まれる。本研究は単年度のみの関わりに留まらず、継続して取り組んでいきたいと考える。

高齢者の健康づくり活動は、保健分野のみならず介護・福祉分野が連携し、既に積極的な取り組みがなされている。高齢過疎地域はハンディや課題の多いと捉えがちである。だが、今回の調査結果からは、住民は地域に対する強い愛着や、自立した生活に対する自信を持ち、自尊心が高い可能性があることが示唆された。今後の方向性として、高齢過疎地域という言葉の持つ先入観に捉われず、住民の想いや自尊心が十分に尊重される健康づくり活動を展開しなくてはならないと考える。

一方で、健康づくり活動の新しい方法論の創造を推進していくことも必要である。今回は、学生の演習の対象地域とすることで、新たな視点を見出した点も成果であると考ええる。学生の新鮮な視点による活動は、健康課題発見の切り口を広げ、住民の気づきを促し、問いを投げかける。学生と住民が積極的に交流する機会を設けていくことが、健康づくりに対する学びと気づきを促すものと考ええる。

また、働きざかりの成人期の男性が意見を交換できる場を設けることも、住民の学びと気づきを促す場であるという手応えを得た。若い世代は地域や健康づくりに関心がないのではなく、考え集う機会を持ちにくいのではないかと考える。今回のワークショップで感じた手応えを、住民主体の活動へ発展させるような介入方法を今後検討したい。

# 障害平等研修の実施とその効果

田島明子<sup>\*1)</sup>、高木誠一<sup>2)</sup>、小出隆司<sup>3)</sup>、鈴木美絵<sup>4)</sup>  
稲松義人<sup>5)</sup>、笠原賢二<sup>6)</sup>、堀内信弘<sup>7)</sup>、千葉寿夫<sup>8)</sup>

1) 聖隷クリストファー大学、2) 浜松協働学舎、3) 浜松市手をつなぐ育成会、4) 天竜厚生会、5) 小羊学園、  
6) CIL 浜松、7) 浜松市障害福祉課、8) 特定非営利活動法人・障害平等研修フォーラム

## 1 はじめに

障害を持つ当事者の人権をめぐる国内は近年、大きな動きを見せている。2013 年は障害者差別解消法が成立し、2014 年に入り、日本は障害者権利条約に批准をした。2 年後には障害者差別解消法が施行される。こうした流れを受け、各地方自治体において、障害者差別禁止条例が作られ始めている。千葉県が全国初の条例を作った後、北海道、岩手県、熊本県、八王子市、最近では京都府において「障害のある人もない人も安心して生き生きと暮らせる社会づくり条例」が京都府議会本会議にて可決成立した。

浜松インクルージョン研究会（以下、研究会とする）は、平成 20 年に厚生労働省の委託を受けた地域研究事業を発端に集った障害福祉研究者、障害福祉に関わる支援者によって、インクルーシブな地域を創造するための研究組織として発足した。平成 21 年度には障害者権利条約について、平成 22 年度には当事者の声を聴くこと、23 年度は地域生活の在り方、24 年度は自立支援協議会のあり方について議論を行ってきた。

2016 年 4 月から障害者差別解消法が日本において施行されることになる。差別解消法の根本理念は「障害の社会モデル」という発想である。つまり、障害により生じる問題を障害のある人の身体に帰属させるのではなく、少数派に対する社会の側の無配慮から生じることを多数派である障害のない人たちがしっかりと認識し、解消に努めるべきという考え方である。

今回応募者は、障害平等研修（Disability Equality Training、以下研修とする）というイギリスで誕生した「障害の社会モデル」の考え方を一般市民に啓発する研修を知った。イギリスは 1995 年に障害者差別禁止法が制定された後、「障害の社会モデル」の考え方を一般市民に普及啓発することを目的としてこの研修プログラムを作成した。研修プログラムは普及啓発を目的したものと、ファシリテーターとなる障害当事者を養成するための研修に大別される。研修のポイントは、①差別解消法を推進する、②障害当事者がファシリテーターであること、③対話型・発見型学習であること、である。

浜松市においても、市民向け意識啓発のための研修と同時に、障害当事者をエンパワメントし、市民への啓発活動が可能な立場となれるファシリテーター養成の研修も不可欠である。浜松市に在住する障害当事者がファシリテーターの資格を持つことで、2016 年 4 月の法施行以降は、障害平等研修を浜松市在住の障害当事者がファシリテーターとなり実施できる可能性も生まれる。それは、浜松市において障害当事者がエンパワメントすることにも繋がると思う。そこで、2015 年度は浜松市内において研修を 2 回実施した。浜松インクルージョン研究会の会員である静岡県内に在住する 2 名の障害当事者がファシリテーター養成研修に参加し、2 回目の研修ではファシリテーターを務めることとした。

## 2 研究方法

DET について：2 回実施した。1 回目が、2015 年 10 月 31 日（土）の 13 時から 17 時 30 分、2 回目が、2016 年 3 月 21 日（祝）の 13 時から 17 時 30 分であり、どちらも聖隷クリストファー大学内の教室にて行った。1 回目のファシリテーターは、三好型遠位型筋ジストロフィーによる障害を持つ林早苗氏であった。2 回目は、浜松インクルージョン研究会会員である笠原賢二氏（浜松市在住）、大川速巳氏（静岡市内在住）であった。笠原氏、大川氏とも、交通事故により頸髄を損傷し、以来車椅子生活をしている。また笠原氏、大川氏は、静岡県内で障害平等研修（DET）ファシリテーターの資格を持つ最初の 2 名となった。DET であるが、最初に参加者に「障害とは何か」



を訊ね、終了時にも同様に訪ね、最初は B4 用紙の半分上、終了時には半分下に記入をしてもらう。今回行ったプログラムは、①車いすに乗る男性の絵(図1)を見てどこに障害があるかを考え、答えてもらう、②健常者が少数派で障害者が多数派になった仮想社会(12 場面ある)についてのビデオ上映(図2)、③箱に星形のものを入れる際どのように入れるかを考え、答えてもらう、などであった



図1



図2

#### 参加者の募集方法:

チラシを作成し、浜松インクルージョン研究会会員 ML や、本学リハビリテーション学部作業療法学科学生等に周知を行った。

#### 対象:

方法の1)、2) については、第1回目の研修の参加者23名とした。方法の3) については、浜松インクルージョン研究会会員であり、静岡県在住の障害当事者2名とした。

#### 方法:

- 1) 研修会実施後に、アンケート調査を実施し、「全体」「内容」「運営」について10件法(10が最も良い、1が最も悪い)での評価と「その理由」、また「障害平等研修について」を訊ね、その回答から研修の有効性を判断する。
- 2) 研修内で障害についての認識の変化の記述を行ってもらうため、その内容を基に研修の効果の測定を行う。
- 3) 2016年度以降の浜松市内での研修のファシリテーターを地域の障害当事者が実施したか否か。

## 3 結果

### 1. 研究会後のアンケート結果

第1回目の研修のアンケート結果から、全体、内容、運営の10件法の平均値と、障害平等研修についての自由記載を掲載する。

①平均値 全体:9.087、内容:8.9、運営:8.8

②障害平等研修について

自由記述は、内容の類似性と差異性との比較検討から、<障害の捉え方の変容><気づきを得る機会><自ら動くことの大切さの認識>の3つにカテゴリ化された。

### <障害の捉え方の変容>

- ・会社で自分が「障害」についてどう考えていくのか、方向性が見えた気がしました。（「障害者」を考えるのではなく、自分がどう考えるのか、周りの環境をどう変えるか!）
- ・今回の研修に参加して、障害には環境因子が大きく関わることを知ることができた。作業療法士として今後、仕事をしていく上で、職場の人、クライアントが障害をどう捉えているかを考えながら仕事をしていきたいと感じた。
- ・障害は個人ではなく、社会側の問題なので、その問題をどう解決してゆくかのヒントになりました。
- ・今回、逆転の世界のビデオを見て、本当の意味で障害は環境によってつくられるということを理解したように思う。今の日本を考えると、完全になくすことは難しいかもしれないが、少しずつでも行動していきたい。今日感じたことを大切に、忘れないようにしたいと思った。

### <気づきを得る機会>

- ・とても興味を持っていた内容でしたし、はっと気づくことができました。
- ・授業で障害についての理解はできているとおもっていたが、参加者やファシリテーターの話を聞いて、まだ障害に対する偏見が残っていることがわかって良かった。
- ・会社のこと、障害者のことを思っで…という奢りにならず、まず、自分がどうあるべきか、自分がどのような意識をもつべきか、を知る（気づく）とても有意義な研修を体感できました。
- ・自分が知らなくて行っていたことなど、改めるきっかけになりました。
- ・ビデオの逆さまの世界のいやーな感じには、考えさせられるものがありました。
- ・今まで障害ということについて「わかっている」「知っている」つもりになっていたのかもしれないと思いました。
- ・知識として知っている場合、「わかったつもり」になってしまわないか、常に自問自答しなければと感じました。

### <自ら動くことの大切さの意識>

- ・社会の障壁を減らしていくために、自分にできることから動いていければと思います。
- ・社会を変えるためには、本当に時間もお金もかかるとは思いますが、少しずつ動いていくことで何かが変わるのではないかと感じました。やはり初めは「知る」こと、「考える」ことが大切だと思いました。
- ・自社内の体制を整えて、会社全体が「障害」という意識そのものをもたなくても済むよう、社員が受講できる機会を作りたいです。
- ・障害がある方の意見を聞くことができ、当事者の方から聞いた話だと、会社などへ伝えやすい（信憑性が高い）ため、とても勉強になりました。
- ・今日の話を持ち帰るだけではなく、行動に移すようにしたいです。
- ・今後、この「障害の社会モデル」の視点をいかに伝え、広めていくかが大事。
- ・障害の正しい理解や意識の変革を、私自身が日々の生活の中に取り入れながら過ごさなければいけないと感じました。

## 2. 研修内で「障害」についての認識の変化の記述

研修では、初回時に参加者に「障害とは何か」を訊ね、終了時にも同様に訪ね、最初は B4 用紙の半分上、終了時には半分下に記入をしてもらうため、第 1 回目の研修の初回時と終了時の回答を、それぞれ内容の類似性と差異性から比較検討し、カテゴリ化をし、カテゴリを説明する概念名を付した。初回時と終了時の回答者の変化がわかるように初回時と終了時の回答に同様のナンバリングを行った。

### ①初回時

#### <生きにくさを生じさせるもの>

充実した生活を送る上で困難を感じる心身または社会的不利 (14)、人を生きにくくするもの (16)、日常生活で支障を感じる要因 (20)

#### < 人によってつくられる社会のかべ >

心(1)、社会のバリア(2)、見えるものと見えないもの、かべ、かんじるもの、へだたり、個性(3)、人がつくるもの(4)、かべ(10)、社会的不利(13)、心のバリア(18)、バリア(22)

#### < 個性 >

見えるものと見えないもの、かべ、かんじるもの、へだたり、個性(3)、その人らしさ(8)、個性?(9)、その人の特徴(11)

#### < 受け入れ難い個性 >

自分らしさを見つけにくくするもの(5)、受け入れ難い個性のひとつ(7) 意識したくないもの(17)

#### < 他者の助けを必要とするもの >

できない事(19)、誰かに助けてもらいながら経験していくもの(23)

#### < 誰にでも関わるもの >

だれにでもあるもの(6)、誰にでも関わりのあるもの(15)

#### < その他 >

うず(12)、外から見えるもの、見えないもの(21)

### ②終了時

#### < 解消するために考えるべきもの >

なくしたいもの(7)、考えなければいけないもの(23)

#### < 変えられるもの >

知ること、なくすことができるもの(8)、人がつくり、人が変えるもの(6)、周りの環境によって変わるバリア(22)

#### < 人の無理解から生じる偏見や排除 >

環境と心(1)、個人ではなく、社会の障壁、排除と偏見(2)、知ろうとしないこと(3)、無知無理解(10) 人に暮しにくさを感じさせる環境、排除や偏見(14)、他者を理解できないこと(20)

#### < 人・多数派・環境・社会によって作られたもの >

多数派による常識に作られたもの(5)、作られるもの(6)、周囲がつくりだすもの(9)、環境がつくりだすもの(11)、周り、環境が作り出すもの(13)、社会の中で作られるもの(15)、少数派 VS 多数派(16)、多数派が考える社会(18)、「理解できない人」が作りだすもの(21)

#### < その他 >

人と人之间に生まれるもの(4)、見えない構造(12)

### 3. 静岡県内に在住するファシリテーターによる研修実施

第2回研修は、静岡県内に在住する、ファシリテーター養成研修を受けた障害当事者である研究会会員2名が実施した。

## 4 考察

研修により、障害の捉え方に大きな変容が生じていることが明らかとなった。当初は、参加者の多くが、障害を持つ個人にとって、生きにくさや受入れ難しさ、自立を困難にする否定的経験として捉えていたが、研修終了後は、障害は多数派の無理解によって生じるものであり、可変的であり、障害をなくすために一人ひとりが考えていくことが大事であると認識が変化していたことがわかった。またアンケート結果から、参加者にとってDET研修が、気づきを得る機会となり、障害の捉え方が変容し、自らが動くことの大切さの認識できる機会となっていたと語られていた。近年の障害を持つ人の人権に関わる法制度も、地域に住む個人のこうした意識変容によって実効化される。DET研修が地域の障害当事者によりファシリテートされ、今後、多くの場、人に届けられることが必要だと考える。

2015 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議

委員一覧(所属、職位は 2015 年度時点)

センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
副センター長	入江 拓	看護学部 教授
委員	入江 晶子	看護学部 准教授
委員	佐野 仁美	社会福祉学部介護福祉学科 助教
委員	大原 重洋	リハビリテーション学部言語聴覚学科 准教授
委員	建木 健	リハビリテーション学部作業療法学科 助教

2016 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議

委員一覧

センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
副センター長	入江 拓	看護学部 教授
委員	入江 晶子	看護学部 准教授
委員	井上 菜穂美	看護学部 助教
委員	落合 克能	社会福祉学部介護福祉学科 助教
委員	石津 希代子	リハビリテーション学部言語聴覚学科 准教授
委員	建木 健	リハビリテーション学部作業療法学科 助教

---

保健福祉実践開発研究センター年報  
第7号(2015)

2016年11月1日発行

編集 聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

発行 聖隷クリストファー大学

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL 053-439-1400 FAX 053-439-1406

印刷 日興美術株式会社

---

# 地域と歩む

聖隷クリストファー大学  
保健福祉実践開発研究センター

Community-Based Practice and  
Research Center for Health and Welfare